

修士論文 平成 17 年度

朝・中・日 3 言語併用者のコード・スイッチング
ー日本在住朝鮮族の言語運用に注目してー

お茶の水女子大学大学院
人間文化研究科 言語文化専攻
日本語教育コース
金 珍淑

謝 辞

本論文を完成するにあたり、多くの方々のご指導・ご協力をいただきまして、心から深く御礼申し上げます。

まず、本論文を計画の段階からご指導くださり、論文の書き方、構成など貴重な助言をくださいました指導教官である岡崎先生、この研究にまで導いてくださった副指導教官である森山先生、論文の書き方を基礎から教えてくださって佐々貴義則先生、暖かい励ましの言葉をくださった佐々木泰子先生と加賀美先生に心より御礼申し上げます。

そして、草稿を読んでもくださり有益な助言をくださった、本学日本語教育コース修士1年の文殊組みの石井さん、金さん、申さんと先輩のスイリポーンさんに心より御礼申し上げます。

また、データ収集及びデータの分析にあたり、多くの方々に協力していただきました。皆様のご協力により、草稿が成り立ちました。心より御礼申し上げます。

最後に、修士論文完成までにお互いに励ましあったお茶の水女子大学日本語教育コースM2の皆さん、常に支えてくれた家族に心から感謝しております。

金 珍淑

2006年 2月10日

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の動機と背景.....	1
1.2 中国朝鮮族の言語背景	3
1.3 本論文の構成.....	5
第2章 先行研究	6
2.1 CS の定義.....	6
2.2 社会言語学における言語選択に関する研究—マクロ的観点.....	7
2.2.1 言語選択に影響する要因に関する理論	8
2.2.2 言語選択に影響する要因に関する研究	9
2.3 社会言語学におけるCSに関する研究—ミクロ的観点.....	10
2.3.1 CSを引き起こす要因に関する研究.....	11
2.3.2 CSの機能に関する研究.....	11
第3章 研究概要と枠組み	15
3.1 本研究の位置付けと研究目的	15
3.2 研究方法	15
3.2.1 協力者	16
3.2.2 データの種類と収集方法	16
3.2.2.1 質問紙調査	17
3.2.2.2 自然会話収集.....	17
3.2.2.3 フォローアップ・インタビュー	17
3.2.3 分析の視点と文字化記号の説明	17
3.2.3.1 発話文の認定.....	17
3.2.3.2 CSの認定.....	18
3.2.3.3 文字化記号の説明	18
3.3 分析枠組み	18

第4章 分析の結果と考察	21
4.1 量的分析の結果と考察	21
4.1.1 言語上の要因によるCS	22
4.1.2 機能上の要因によるCS	23
4.2 質的分析の結果と考察	25
4.2.1 言語上の要因によるCS	25
4.2.1.1 言語の特徴	25
4.2.1.2 聞き手の言語能力	34
4.2.2 機能上の要因によるCS	36
4.2.2.1 談話調整	36
4.2.2.2 相互作用	39
4.2.2.3 アイデンティティ表示によるCS	40
第5章 総合考察	43
第6章 まとめ	47
6.1 結論	47
6.2 本研究の意義	48
6.3 今後の課題	48
【主な参考文献】	50
【付録】	53

第1章 序論

本章ではまず研究の動機と背景を述べ、それから本研究が対象とする朝鮮族¹の言語背景に触れ、最後に本論文の構成について述べる。

1.1 研究の動機と背景

世界には、3000 から 6000 もの言語があると言われている。この数は国家の数より多く、この点からも単一言語社会より多言語社会が一般的であることが分かる。さらに近年はグローバル化の進行に伴う人々の移動が激しくなり、これまで単一言語社会であった地域や国も多文化多言語社会に移行し始めている。このような多言語社会に生活しているバイリンガルまたはマルチリンガルの言語使用を見ると、二つまたは三つの言語を混ぜて使っていることに気がつく。

以下に示した例1は、中国の朝鮮族である筆者（H）と家族（O）による日常のやりとりの中から抜粋した会話である。

例1：(朝鮮語→日本語)	(訳)
H: 벌써 일년 다 지나가네	H: もう一年が終わったね
O: 빠르기도 하다	O: 本当早いな
H: 또 대청소 해야지, 今年と一緒にやってくれるよね	H: また大掃除しないと、 今年と一緒にやってくれるよね
O: 시간 되면	O: 時間があったら

筆者の家庭における使用言語は朝鮮語である。しかし、上の会話例が示すように、朝鮮語から日本語への切り替えが見られる。朝鮮語でも充分言えることであるにもかかわらず、何故日本語への切り替えが生じているのだろうか。

このような現象はコード²・スイッチング（以下CSと呼ぶ）と呼ばれ、従来からいろいろな観点で研究がなされてきた。初期の研究では、新しい文法とシステムの習得に伴う言語干渉として捉えられたり、また、第二言語習得途上における「借用」、あるいはコミュニケーション・ストラテジーの一種（Torone1977; Blum-Kulla&Levenston1983 など）として位置づけられたりした。

しかし、近年の社会言語学の展開にともない、CS は参加者の属性、場面、話題などの要因より、一定の統語上の規則³をもって引き起こされ、コミュニケーション上さまざまな機

¹ 朝鮮族：中国に住居する朝鮮民族のこと。中国の国籍を持ち少数民族の待遇を受けている。

² コード：言語あるいはその変種のこと（ウォードハフ 1994）

³ 統語上の規則：句・文の構造に関する規則

能を果すものとして評価されるようになった。例えば Gumperz (1982) は次のように CS を捉えている。バイリンガルにおいて、マイノリティーの言語は『我々』コードとみなされ、グループ内の活動やインフォーマルな活動に関連付けられる傾向が強く、他方、マジョリティーの言語は、『彼ら』コードとみなされ、フォーマルな、堅苦しい、個人的なことではないグループ外の活動に関係づけられて使われる傾向が強い。バイリンガルがグループ外の人々と関わる際には、『彼ら』コードが使われるが、バイリンガルな状況では、もう一つの『彼ら』コードを使っても、『我々』コードを使ってもコミュニケーションができるという意識が資源となり、言語をこの二つのコードの間で適宜切り替えることで、口にしていく言葉に特別の意味を添える。

このような CS の捉え方も踏まえて改めて上記の例 1 を見てみよう。例 1 の話し手でもある筆者にとって、朝鮮語は『我々』コードであり、一方日本語は『彼ら』コードであると思われるが、ここでは、『我々』型の朝鮮語で団結を表しているようにも、『彼ら』指向の日本語で家族と距離を置いているようにも見えない。では、家族間で生じている朝鮮語から日本語への CS は何をきっかけとし、何を目的として起っているのだろうか。CS することで新たな意味は加わっているのだろうか。

ここで考えられるのは、朝鮮語と日本語の依頼表現の違いである。日本語には「…てくれる、…てもらえる」など、依頼の定型表現があり、そういう表現が朝鮮語では「해주다」のように「する」という動詞の中に含まれていて依頼表現が目立たない。上記の例ではこういった朝鮮語と日本語の違いを認識し、朝鮮語から日本語に切り替えることで「依頼」という部分を強調したのではないか。この解釈が正しければ、CS に影響した要因⁴は朝鮮語と日本語の差異であり、それぞれの言語が持っている特徴であるのではないだろうか。

しかし、これまでの研究では、CS を引き起こす要因として、参加者の属性（言語能力や社会的なもの）、場面、話題などが挙げられているが、CS する言語と CS される言語の差異と言語自体の特徴を要因としてみた研究は管見の限り見当たらない。

本研究では、言語の特徴という要因を中心に CS を引き起こす諸要因を探ることを目的とする。ほかの要因はさておき、言語そのものの特徴が CS を引き起こす影響要因の一つとして探るには二つの言語だけを扱うのでは説得力がないと考えられる。そのため、本研究では朝鮮語・中国語・日本語の 3 言語を不自由なく朝鮮族の留学生を対象とし、同じ朝鮮語母語話者が、朝鮮語から中国語へ、朝鮮語から日本語へ CS する方向を比較する研究方法を取る。中国朝鮮族の多言語使用の背景を踏まえて、CS された言語に見られる、言語の特徴から CS に与える影響を明らかにすることができるように考えるためである。本研究の結果から、バイリンガルに見られる CS が、自らの持つ言語的資源を必要に応じて巧みに活用するコミュニケーション能力の発動されたものであることが示唆されると考える。

⁴要因：本研究では、CS を引き起こすきっかけとなる重要な要素を、「CS を引き起こす要因」と定義する。

尚、言語選択の場合は、「言語選択に影響する要因」とし、
言語選択と CS 両方を同時に扱う場合は、「言語選択と CS に影響する要因」とする。

1.2 中国朝鮮族の言語背景

本論に入る前に、本研究で対象とする朝鮮族の言語生活を、歴史的な背景から、どのような過程を経てきたのか、現在の状況はどのようなものであるかについて概観する。

中国在住の朝鮮族は約 200 万人⁵おり、その内 85 万人が延辺朝鮮族自治州⁶に、約 115 万人が吉林省、黒竜省、遼寧省に散在している。朝鮮族の中国への移住は 17 世紀から徐々に始まったが、1860 年と 1869 年の朝鮮半島の大飢饉、1901 年以降の日本による朝鮮半島への侵略を逃れての移住者が中心である。特に、1910 年から 1945 年までの時期には、日本の支配に対する独立運動や朝鮮半島における政情不安から中国に移り住む人々が多く出た（任榮哲 2004）。

中国移住が開始してからの約 150 年間、朝鮮族は異民族との接触を通して歴史的に見れば 4 段階に渡って二重言語生活を余儀なくされた。それは、初期の①朝鮮語と満族語⁷、から、②朝鮮語と中国語、③朝鮮語と日本語、を経て、現在は主に④朝鮮語と中国語（漢語、以下中国語）の二重言語生活となっている。このような二重言語生活にも関わらず、朝鮮族は、自民族の言語として朝鮮語を保持してきた。

中国は、56 の民族からなる多民族国家であり、「漢族」が全人口の 92%を占めており、一般的に教育は中国語で行なわれれている。しかし、中国の憲法には、「少数民族は、民族語を使い、民族語で教育を受ける権利を持つ」と明記されており、少数民族は「普通の学校（漢族の学校）」も、「民族学校」も自由に選択することができる。このような民族教育政策のもとで、朝鮮族の民族教育は他の民族より優れた教育成果をあげている（表 1 を参照）。

表 1 中国各民族の最終学歴（1 万人あたりの人数を示す）

民族名	大学	高中	初中	小学校
朝鮮族	432.2	2095.8	3376.9	2332.3
漢族	143.1	811.2	2385.4	3706.6
モンゴル族	184.7	1029.5	2180.8	3515.7
ウイグル族	89.4	514.7	1191.9	4329.8
壮族	57.0	568.5	1746.7	4572.6
イ族	26.1	207.9	848.7	3420.2
全国平均	139.0	792.9	2323.3	3706.6

出典：第四次人口普查資料『中国少数民族人口』をもとに本田（2005）が作成

本田（2005）は、朝鮮族の教育成果を、言語環境（①民族語に文字がある、②民族語が

⁵ 第 5 次全国人口調査資料によると、2000 年朝鮮族の人口は 200 万人を上回るとしている

⁶ 延辺朝鮮族自治州は、1952 年少数民族地域における民族区域自治政策の施行を受けて創立した。8 の県と市に 218 万人が住んでおり、その内朝鮮族は 39%を占めている

⁷ 満族語：中国最後の王朝－清朝を立てた満州族の言葉であるが、現在は使われていない

統一されている、③民族語で教えらるる教員がいる、④民族語の教科書がある、⑤民族語で進学（受験）できる、地理・社会的条件、民族の内部に備わっていた要因が整っているから説明をしている。しかし、すべての朝鮮族が同じ条件で教育を受けているわけではない。現在の朝鮮族3世・4世⁸の言語実態をみると、ほとんどが朝鮮語と中国語の二言語教育を受け、朝鮮語と中国語二言語併用者であるが、彼らを取り巻く家庭や学校（小学校～高校まで）及び社会環境で使われる言語の違いにより、大きく4つのタイプ(表2)に分けて考えることができる。

表2 朝鮮族の言語環境と言語能力

タイプ	社会言語	家庭言語	学校言語	優位言語
I	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語優位（朝≫中）
II	中国語	朝鮮語	朝鮮語	朝鮮語優位（朝>中）
III	中国語	中・朝	中・朝	中国語優位（朝<中）
IV	中国語	中国語	中国語	中国語優位（朝≪中）

上記のように、言語環境、地理・社会的要因、民族内的要因、また歴史的な言語背景の変遷により、朝鮮族社会の言語生活、アイデンティティは複雑であり、朝鮮族の言語運用の実態をみると、極めて多様であることが分かる。しかし、これまで朝鮮族に関する研究はエスニシティ研究、マイノリティー研究、二重言語教育政策研究など社会的観点からの研究が多く、朝鮮族の言語生活を言語運用の観点から探った研究は数少ない。朝鮮族の言語生活に焦点を当てた研究は管見の限り任榮哲(2003)のみである。任は、「在外韓国人」⁹の意識構造や言語生活の実態とその背景を明らかにするために、単一民族・単一言語社会と言われる日本に住む「在日韓国人」と、多民族・多言語社会と言われるアメリカ・中国に住む「在米韓国人」と「在中朝鮮族」を対象として大がかりな国際言語調査を行ない、民族言語の使用能力・使用頻度・伝承意識、定住国文化への適応度、言語の使い分けなどの点から在日、在米、在中の比較を行なった。

結果、在中朝鮮族は（在日韓国人、在米韓国人に比べ）、家庭の中で朝鮮語がよく使われ、朝鮮語優位の複合型の二重言語生活を営んでいる人々が多いことが分かった。また、民族言語伝承意識が高く、どの場面でも中国語より朝鮮語が多く使われるが、話し相手が自分より年上であればあるほど朝鮮語がよく使われることが指摘されている。

本研究では、先に提示した四つのタイプの中で、タイプIIの家庭言語が朝鮮語、小学校から中学校までの学校言語が朝鮮語であり、学校・家庭以外の社会の言語は中国語という二言語環境で教育を受け、朝鮮語を優位としながらも、中国語能力もネイティブスピーカなみに高い朝鮮族5人を研究対象とする。詳しくは4.2.1の「協力者」で述べる。

⁸ 3世・4世：中国に最初に移住してきた世代を1世とし、その子孫であり中国で生まれ育った者を3世・4世とする。年齢的には20～30代ぐらいである

⁹ 在外韓国人：祖国を離れて海外に住む朝鮮・韓国系

1.3 本論文の構成

本論文は、6つの章で構成されている。第1章では、これまで述べてきたように、本研究の背景、動機として、筆者の日常会話でのCSの例を取り上げ、それが先行研究で得られている知見では説明できない部分があることを述べ、本研究の必要性を指摘した。続いて、本研究で対象とする中国の朝鮮族の国での言語背景を述べた。第2章では、CSの定義、先行研究で得られている知見と問題点を概観し、残された課題を述べる。第3章では、本研究の概要と枠組みについて、本研究の位置付け、研究目的、研究方法、枠組みの順に述べる。そして、第4章では、研究課題ごとの分析結果と考察を述べる。さらに第5章では、第4章で明らかになった分析結果と考察を踏まえて総合的な考察を試みる。そして最後に第6章では、本研究の結論、本研究の意義、今後の課題を述べる。

第2章 先行研究

本章では、CS に関する先行研究を概観するとともに、本研究の研究史的な位置付けを述べることを目的とする。

CS に関する研究は大きく CS を要因、CS の統語上の規則、CS が果たす機能の 3 つに分けることができる。本章では、主に CS を引き起こす要因と CS が果たす機能に関する研究に重点をおいて見ていくことにする。前提としてまず CS の定義をまとめる。

2.1 CS の定義

先行研究を見ると観点の違いにより CS の定義も少しずつ異なることが分かる。

Faerch & Kasper(1983)は、第 2 言語習得の観点から CS を定義している。彼らは言語の産出におけるコミュニケーション・ストラテジーの中でも、学習者が身につけているコミュニケーション・リソースをフルに活用して問題を解決しコミュニケーションを続けようとするものを達成ストラテジーとし、その中の補償ストラテジーの下位分類として扱っている。即ち、CS は学習者が会話に行き詰った場合に補償ストラテジーとして言語不足を補って別の言語を使用せざるを得ない場合に限定されている。

では、両言語に精通しているバイリンガル社会では言語の熟達度とは関係なく起きる CS はどのように定義されているのだろうか。

ウォードハフ (1994) は、「状況による CS」と「隠喩的な CS」の二種類に分けて考えている。「状況による CS」は、話者がある状況では一方の言語を話し、別の状況では他方の言語を話すというように、使用される言語が場面によって変化する時に起きる。その例としてある特定の活動が行なわれる場所（例えば、家、学校、仕事場）によって使う言語が変わるが挙げられる。一方、「隠喩的な CS」は、話題の変化によって使用言語を変えなければならないときに起きる。この例として、例えば形式ばった状況からくだけた状況へ、まじめな状況からユーモラスな状況へ、丁寧で距離を置いた状況から団結意識のある親しい状況への移行によって言語が変わることが挙げられる。

Gumperz(1982)は、「コードの変換が状況によるもの」は、CS とは区別して、ダイグロシアであるとみなしている。そして、ダイグロシアは意識して使われる場合が多く、どんなときでも一時的には（一つの状況では）一つのコードしか使われないとした。その上で、彼は隠喩的使用と会話的使用を含めた「会話内 CS」の存在を提唱し、「二つの異なる文法システムあるいはサブシステムに属する会話の一節を、言葉の一連のやり取りの中で並置すること」と定義した。会話内 CS は、同一状況におけるコードの切り替えであることが特徴であるとし、話者自体はどのコードが使われているのか意識していないことが多いとした。また、CS は人間のミクロレベルのインターアクションに関わる複雑且つ深い現象であり、

状況や話題の変化や、無標言語¹⁰と有標言語の区別なく 2 言語を使用するのが規範となっているとした。

また、Marguerite&Hakuda(1991)は、「CS は翻訳と同じく、バイリンガルの言語能力を考慮する必要があるが、CS の目的、使用、要求において翻訳とは異なる」と CS を翻訳と比較しながら、翻訳は、モノリンガルの話者を相手に彼／彼女の理解を高めるために、同じ発話を原語から目標言語に置き換えることを目指すのに対し、CS は、「バイリンガル話者を相手に彼／彼女の理解を高めるために、発話を同等に再生するのではなく、二つの言語の暗示的・明示的・社会的な意味の差異を有利に使うことを目指す。」とした。

バイリンガルのスピーチパターンにおいて、CS ともっとも区別しにくいものとして、干渉 (interference)、借用 (borrowing)、コードの混用 (code mixing) といった現象が挙げられている。ベーカー (Baker1993) は、「言語の借用はある言語体系に外国語から借用語を取り入れることである。コードの混合は、一文中に数語混じる語レベルでの変化を言うときに使われる用語である。CS は、二言語を使い分けることであり、ある程度意図的で目的を持った交替を説明するのに使われる。」とした。しかしながらこの区別は極めて曖昧なものであり、「コード切り替えとコードの混用、そして借用を区別する努力は徒労であろう。」(Eastman1992)。これは、特に多言語の飛びかう都会をフィールドとする場合、多様な言語的背景を持つ人々が日常的に交流していることため、「普通の会話においていろいろな言語からの材料が基幹言語のなかに日常的に、目立たないように埋め込まれている」(Eastman1992) からである。

本研究では、同一状況における三つの言語的背景を持つ人々の日常的な会話であることから、CS を、「二つ以上の言語を同じ発話もしくは会話内で並置したり (文間 CS)、基幹言語の中にもう一つの言語が埋め込まれたり (文中 CS) すること」と定義し、分析する際には、文間 CS と文中 CS の区別はしない。なお、本研究では、以下のものは CS として認めない。

- ①人名
- ②一連の会話でお互い違う言語で話し続ける場合
- ③対話者の発話をそのまま繰り返した場合

2.2 社会言語学における言語選択に関する研究—マクロ的観点

本節では、社会言語学者により、多言語社会での言語使用傾向を予想するために提唱された理論を概観し、その理論に基づいて行なった言語選択に影響する要因に関する研究を紹介する。

¹⁰ 無標言語 (Eastman1992) : 普通の会話においていろいろな言葉からの材料が基幹言語の中に日常的に目立たないように埋め込まれる言語 ;
有標言語は、人が配慮している社会的、政治的、経済的な目的のために CS される言語

2.2.1 言語選択に影響する要因に関する理論

CS に関する初期の研究は、言語選択を出発点としたものが多い。社会言語学者たちは、言語選択に影響する要因を「ドメイン」、「オーディエンス・デザイン」、「スピーチ・アコモデーション理論」などの理論を提唱し説明しようとした。

社会言語学者のフィッシュマン (J. Fishman 1971) は、言語の選択は場面によってある程度予見可能であるとし、その場面をドメイン (domain: 領域) と呼ぶ。ドメインは、時間、状況、人間関係などの要素を総合した私達の活動範囲をさす言葉であり、ドメインによってどの言語が使われるかが決定されるとしている。フィッシュマンはドメインの例として「家庭」、「友人関係」、「宗教」、「教育」、「雇用関係」の5つをあげている。

例えば「典型的な」中国系シンガポール人の子供の場合、「家庭」では、親と福建語で話し、「兄弟」とはくだけたシンガポール英語で会話をする。「友人関係」では、友達と福建語かくだけたシンガポール英語で会話する。「教育」の場では、シンガポール英語の形式ばった変種と北京官話が使用される。その家庭の「宗教」がキリスト教なら宗教的儀式はシンガポール英語の形式ばった英語で行なわれるが、仏教や道教の場合には福建語が使われる。「公務員」が使用する言語はシンガポール英語の形式ばった変種だが、北京官話もときに応じて使用される (Platt and Platt 1975)。シンガポールに暮らす人々には使用する言語の選択肢が多くあるように見えるが、実はその選択は任意というわけではない。言語を実際に選択するときにはドメインに示されたような要因で決まるのであろう。

こうしたドメインの考え方は、2言語併用者の言語使用を、ある程度予測することが可能であり、多言語社会でのさまざまな言語選択・使用を考える際の有効な道具と考えられる。

ベル (Bell 1984) は、「言葉の変異のあらゆるレベルにおいて、人々はまず自分以外の人に反応しており、話者は聞き手に対してそのスタイルをデザインしている」と「オーディエンス・デザイン」を提唱し、話し手が払う注意の度合い、種類というには、相手が会話にどの程度関係しているか、話し手から見た相手の立場、資格と関連しているとした。ベルは個人の言語スタイルに聞き手が大きな影響を与えることを主張するわけだが、どの類の人がどの程度の影響を与えるかを次のような仮説を立てた。

話し手 > 聞き手 > 傍聴人 > 偶然聞く人 > 盗み聞く人

つまり、話し手の言語スタイルにもっとも影響するのは「聞き手」であり、それから、「傍聴人」、「偶然聞く人」、「盗み聞く人」の順に、この影響力は弱まっていくと主張した。ベルはさらに、このさまざまなオーディエンスが、場面やトピックなどよりも、もっと大きな影響を話し手のスタイルに与えると主張している (東 1997)。

ベルは、以下のように、ニュージーランドの公営放送局における興味深い研究を報告している。この放送局では、アナウンサーたちは、1つのスタジオで2つのラジオ局のためにニュースを読んでいる。この二つのラジオ局は、社会的地位が高い YA と比較的低い ZB である。面白いことにアナウンサー達は、その局の社会的地位にあったバリエーションで

ニュースを読んでいることが分かった。これは、話し手は聞き手のスタイルに強く影響される、というオーディエンス・デザインの予測にかなったものだといえよう。

オーディエンス・デザインによると話し手は、聞き手を含めたオーディエンスに深く影響されているが、それでは一体どのように影響されているのだろうか。

(N. Coupland 1984) は、旅行代理店社員が客の話し方に自分の話し方を合わせて話していることを発見した。まるでカメレオンのように、相手に合わせて自分の話し方を変えているのを見て、「話し手は相手に受け入れられるために、自分の話し方を相手のスタイルに近づけようとする」というスピーチ・アコモデーション理論」を提唱した。例えば、相手が大人か子供かによって話し方を変えたり、日本語が十分にできない外国人にやや不自然な日本語を使ったりするなどよく眼にすることである。

2.2.2 言語選択に影響する要因に関する研究

ここでは、前節で述べた理論に基づき、「場面」、「参与者」、「話題・内容」といった大きな状況的カテゴリーと結びついた言語選択に影響する要因を分析した研究について述べる。

陳 (1999) は、ドメインの場면을制限し、台湾語は私用語、中国語は公用語として使われる台湾において、中国語と台湾語という二言語の言語選択に影響する要因を、「場面」と「話者の属性」に焦点を当てて探るために、面接調査とアンケート調査を行なった。そして、場面と話者の属性から台湾語の使用傾向について次のような結果を示した。①男性は女性より、台湾語の使用を好む ②年齢が高いほど台湾語を主要言語とする傾向が強い ③教育程度が低いほど台湾語を主要言語とする傾向がある ④話す相手が家族である場合に台湾語を選択した人数がもっとも多く、その次は親友、知り合い、初対面の人という順その人数は減少していく。つまり親しいほど台湾語の使用率が高くなるとした。また、場面と言語選択による台湾語の使用傾向は、同じ学校、または同じ職場であっても上下関係、親疎関係、「内」・「外」関係により台湾語と中国語の使用傾向が異なるとしている。

大原 (2004) は、シンガポールの国立大学の学生 151 人に質問紙調査を行い、標準シンガポール英語 (StdSE) と口語のシンガポール英語 (CSE) の使用実態を明らかにし、多様な言語・変種の選択や切り替えと、アイデンティティの表出と確認の関わりを探究した。大原は、聞き手 (Addressees)、「話題、内容 (Contents)」、「状況 (Situations)」を言語選択に影響する要因として捉えて分析をした。結果のいくつかを紹介すると、①「聞き手」が変数の場合：StdSE を使う時には、先生、目上の人・上司、政府関係者、仕事仲間・関係者といった公的度合いが高い領域と関連する対象が登場するが (計：36.6%)、CSE の使用相手にはまったく出てない。これは、一般に、StdSE はフォーマルな使用に、CES はインフォーマルな使用にと理解されている部分の裏づけとなる。②「状況」が変数の場合：StdSE が公的状況と強く結びついた回答結果が見て取れる。「状況」という言葉の関係は、社会的領域と

言葉の関係であり、言語社会のルールとして認識され、人々はその社会の規範に見合った言語を選択していることが伺える。③「話題・内容」が変数の場合：StdSE、CSE それぞれの使用がかなり重複している。ここでは、「話題・内容」は「聞き手」、「状況」より社会的な領域との関係は多少希薄になる。

Grosjean (1982) は、言語選択に影響している要因として、「状況」、「話者の属性」、「話題」に加えて、インタラクション機能などの話者の潜在的な選択も取り上げ次に挙げるように詳しくみている。

- ① 参加者：言語の好み、言語熟練、言語への態度、年、性、職業、教育、民族的背景、社会経済的地位、親族関係、親交、パワー関係、外からのプレッシャー
- ② 状況：位置設定、単舌音の存在、形式尊重の程度、親交の程度
- ③ 会話の内容：トピック、語彙のタイプ
- ④ インターアクションの機能：ステータスをあげるため、社会的距離を作るため、誰かを排除するため、要求する・命じるため。

以上、マクロ的な観点から言語選択に影響する要因を見てきた。陳 (1999)、大原 (2004) を含めたほとんどの先行研究はインタビュー調査、質問紙調査など被調査者が自己申告したものをデータとする研究方法を取っている。自己申告データに基づく研究では、他の厳重方法と比べて大規模な言語選択のパターンに関して比較が可能であり、且つある目的にかなう情報が、非常に多くの話者から、他の方法と比べて、すばやく得られるという利点がある (レズリー・ミルロイ 2000)。

ここで、多言語社会におけるマクロレベルの言語選択と言語使用傾向はある程度予想可能であることが分かった。しかし、今まで、言語選択に影響する要因を CS にも適用しようとする研究 (陳 1999) は少ない。しかし、Gumperz (1982) は、CS は、人間のマイクロレベルのインターアクションに関わる複雑、且つ深い現象である状況や話題の変化や、無標言語と有標言語の区別なく 2 言語を使用するのが規範となっているとし、実際バイリンガルは無意識のうちにコードの切り替えを行なうことが多く、その結果、話者は自分自身の言語使用を評価したり報告したりすることを求められても、実際の使用とは異なる報告をすることが考えられると述べ、マクロレベルの言語選択とマイクロレベルの CS を区別している。

2.3 社会言語学における CS に関する研究—ミクロ的観点

本節では、ミクロ的観点から分析された CS を影響要因と、それが果たす機能の順に見ていく。

2.3.1 CS を引き起こす要因に関する研究

CS を引き起こす要因は、主に言語選択に影響する要因と同一視され、言語選択に影響する「場面」、「参与者」、「話題・内容」などを挙げて分析した研究が多かった。その中で数少ないが、自然会話に目を向け、CS を引き起こす要因を分析した研究に Gardner-Chloros(1991)がある。彼はストラスブールに住む公用語はフランス語で、普段はドイツ方言を話す人々を対象にして、彼らのCS を引き起こす要因を詳細に提示した。

- ①話者の能力：聞き手の特定化、語彙の不足、
- ②対話者への認識：聞き手の特定化、聞き手の排除、連鎖CS
- ③特定会話の特徴：個人的か客観的か、ユーモラスな影響、イデオロギーの提示、回避戦略、修正戦略
- ④話し言葉の特徴：引用、感嘆、繰り返し、メッセージの限定、緩和要請または命令の強くなること、繰り返しの増大、ユーモラスな影響、回避戦略、ディスコースマーカ、比喩的なスイッチ
- ⑤より深い理由

Gardner-Chloros(1991)は、CS に引き起こす要因を分析するに当たって、自然会話を用いたという点では前の研究とはかなり異なっているが、彼らも言語選択とCS を同じ現象として扱い区別はしてない。しかし、彼らの研究で注目したいのは、言語選択とCS に影響する要因のカテゴリー作成においてそれまでの研究とは違う手法を取っている点である。Gumperz(1982)と Savile-Troike (1982) のCS の機能、Valdes-Falllis(1977)の影響要因などを統合して新たな体系を作り上げ、これまでの言語選択に影響する要因の分析では見ることができなかったものを提示している。「特定会話の特徴」と「話し言葉の特徴」などの新しい観点を提案し、「回避戦略」や「ユーモラスの影響」などの機能的なものもCS を引き起こす要因として提示している。しかし、「特定会話の特徴」と「話し言葉の特徴」が網羅している下位項目の分類には問題点があり検討が必要である。

以上、マクロ的な観点から言語選択に影響する要因を、ミクロ的な観点からCS を引き起こす要因を見てきたが、先行研究では、言語選択に影響する要因として主に「場面」、「話題・内容」、「参与者」が取り上げられ、CS を引き起こす要因には「特定会話の特徴」、「話し言葉の特徴」などが加えられていることが分かる。しかし、以上の要因からは本論文の序論にあげたような「言語の特徴」が言語選択とCS に及ぼす影響についての十分な説明はできない。

2.3.2 CS の機能に関する研究

CS をミクロ的な観点から見た研究はそのほとんどがCS の機能的観点に注目したものである。本研究は、CS の機能に注目しているものではないが、CS を引き起こす要因をみるには、

その要因によって引き起こされる CS が果たす機能を知ること分析の手がかりになると考えられることから、本節では CS の機能に関する研究を概観する。

Gumperz (1982) は、「バイリンガリズムを扱った文献においては、最近まで、会話内 CS は、周辺的な一時的な現象であり、新しい文法システムの習得を伴う言語干渉であるかのように捉えられることが多く、言語的な相互行為において意味的に重要な情報を伝えるということについては、体系的に研究されてこなかった」とし、CS の伝達的な側面に注目した。彼は、ドイツ語とスロベニア語、英語とヒンディ語、英語とスペイン語という 3 つの言語ペアの自然会話を分析資料とし、CS の談話上の機能を①引用、②聞き手の明確化、③感嘆、④繰り返し、⑤メッセージの明確化を示すなど五つに分類している。

Gumperz は、CS が生じる要因として初めて、利用可能な言語資源が修辞上の目的に利用される場合を挙げているが、彼が CS の機能として提示している 5 つの項目から見ると、どのような言語であっても（つまり、堅苦しい言語であっても、やさしい言語であっても）、二つの言語さえ知っていれば、それが資源になって CS を引き起こすと述べることになり、その言語の間に存在する言語上の違いを深く取り上げるといったさらにつこんだ分析はなされていない。

Nishimura (1997) は、カナダ在住の日系二世を対象に、機能とベース言語¹¹の関わりに焦点を当てて CS パターンを分析した。日本語ベースのデータはインタビューで、他方英語ベースのデータ及び日英の混合ベースのデータは自然会話から収集した。日本語ベース、英語ベース、日英の混合ベースそれぞれの資料における CS 機能を分類し、次のような結果を示している。「日本語をベースにした場合の英語への CS」の機能は、①境界表示の談話マーカ―、②語彙のギャップを埋めることである。そして「英語をベースにした場合の日本語への CS」の機能は、英語ベースにおける日本語の象徴的な使用の機能であり、「日英両言語をベースにした場合の CS」の機能は①相互作用機能：a 両者に達する機能、b 関与の強化 ②構成的機能：a フレーム作り、b 話題の提出・再提出 ③文体的な効果を持っている機能：引用など ④機能的に中立的なスイッチなど多様であった。

Nishimura (1997) が、インタビュー形式で収集した「日本語をベースとした」データでは、ほとんどが語彙のギャップを埋める名詞であり、自然会話形式で収集した「英語をベースとした」データと「日英の混合ベース」データでは、日系二世のアイデンティティを示すときや談話的・構成的に関わる機能として使われており、ベース言語の違いにより異なる機能が見られたとしている。しかし、「英語をベースとする場合」と「日英混合ベースの場合」日系二世のアイデンティティを表す機能があると述べているが、日系二世という背景から、「日本人」というアイデンティティ以外にも「カナダで生まれ育った」というアイデンティティが存在し、それが「日本語をベースとする英語への CS」の形で現れる可能

¹¹ ベース言語：CS が起きる際、その基幹となる言語。例えば、日本語をベース言語とする会話における韓国語への CS は、「日本語をベースとする韓国語への CS」とする。

性はないのだろうか。では、「日本語をベースとする場合」はすべての英語を語彙のギャップを埋めるための補償的機能として捉えていいのだろうか。また、日本語と英語の違いを「ギャップ」という一言で一括していいのだろうか。日系二世が認識している日本語と英語には違う役割もあるのではないだろうか。

イヤムポーンスイ・スイリポーンスイ (2003) は、日本在住のタイ人留学生を対象に彼らの電話会話から CS を抽出し文法と機能の二つの観点にそって分析し、CS 使用実態を明らかにした。「タイ語をベースにした場合」CS の機能は、①アイデンティティ表示機能、②話し手内面表示機能、③補償的機能、④中立的機能があり ; 「ベースが特定できない場合」CS の機能は、⑥談話調整機能、⑦相互作用機能、⑧理解達成促進機能、⑨中立的機能があるとした。スイリポーンスイは、ベースとする言語の違いによる機能の量的な差異は見られたが、Nishimura (1997) のような機能のバリエーションの違いは見られなかった。これは、Nishimura が、インタビュー、自然会話形というデータを収集したため、会話形態の違いが機能の違いに現れたのではないかと、自分の研究と比較して指摘している。

都 (2000) は、韓国語母語話者である自身と 9 人の在日コリアン 3 世の自然会話をデータとし、日本語・韓国語バイリンガルである在日コリアン 3 世の CS には「日本語をベースとした CS」、「韓国語をベースとした CS」、「日本語-韓国語混合ベースの CS」の 3 つのパターンがあるとし、そのパターン別に機能を考察した。「日本語をベースとする CS」は、韓国文化の経験にかかわる語彙、メンバーシップを確立する名詞、民族意識や生活文化に密着した概念や物事の名称などによる韓国語への CS がある。「韓国語をベースとする CS」は、韓国の未習得の語彙、日本語にしか存在しない語彙、日本の文化や風習にかかわる語彙など、両言語の語彙ギャップに起因する日本語への CS がある。「日本語-韓国語混合ベースの CS」は、切り替えの単位により文間 CS と文中 CS に分類し、文間 CS では①アイデンティティの表明 ②対人関係維持 a ダブルシグナル b 喚起 (丁寧語による喚起) ③ディスコース構造上の影響 (話題転換のマーキング) ④文体上の影響 (引用) の 4 つ ; 文中切り替えでは、①デュアル・アイデンティティの確認 ②対等拘束 ③語形成の規則性に起因するなど 3 つの機能別カテゴリーがあるとした。

都 (2000) が、対象とした在日コリアン 3 世は日本語を優位とするバイリンガルである。都は比較的弱い韓国語をベースとして、優位言語である日本語へ CS した場合、Nishimura (1997) の「日本語をベースとする場合の英語への CS」を語彙のギャップを埋めるための補償的機能として捉えるだけでなく、両言語の文化や風習などの違いも考慮に入れなければならないとしている。そして、今まで言及されなかった「丁寧語による喚起」を提示し、話者における両言語の丁寧度の差異にも目を向けている。しかし、都は、それを被験者における両言語の位置付けにとどまり、言語的特徴とは関係付けていない。また、機能的観点から分析したにも関わらず「韓国語をベースとする CS」と「日本語をベースとする

CS」ではCSを引き起こす要因を、「日本語—韓国語混合ベース」ではCSの機能を、二つの違う視点が入っているのが窺える。

バイリンガルが認識している両言語の差異に注目した研究に陳（2001）がある。陳は、台湾語—中国語バイリンガルのCSの進行方向に¹²注目し、2種類の一方進行CS¹³の共通の機能を見出し、言語伝達におけるCSの機能性と二言語の機能的な分業を解析した。台湾人の自然会話資料では、①中国語の基本構文から台湾語へ切り替える方向のみである「感性的な語」CS；②台湾語の基本構文に中国語の挿入することによる「語」CS、の2種類の一方進行CSが観察された。その機能を分析した結果、「感性的な語」、「語」CSは共に、①特に主題化（主題を取り立てること、及び新情報）中心語を目立たせるといったテキスト形成機能を果たしている；②台湾語は感情的な部分に用いられ、中国語は情動的な事柄に用いられる傾向がある；③CSはテキスト形成及び情報の伝達のための「焦点」化の機能を表わし、これによって言語の性格や特徴を反映している、と述べている。

陳（2001）は、機能的な観点から一方進行のCSを観察しているが、その一方進行的なCSを引き起こす要因は、台湾語の感性的な部分と、中国語の情動的な事柄に用いられる特徴であると述べている。これはGumperz(1982)で述べている、二言語を持つことが資源となることにとどまらず、個別の言語がもっている特徴についての知識が資源となりCSに影響していることが窺える。

以上、自然会話をデータとしてCSの機能を分析した研究を見てきた。先行研究で観察された機能は共通する部分もあるが、それぞれ違いが見られた。スイリポーン（2003）は、このような違いを、それら研究対象の相違（対象者、対象者の両言語能力、会話形態、言語環境）によるものだと述べているが、対象者の使用する言語の違いによるものはないだろうか。先行研究で、Nishimura(1997)の、②語彙のギャップを埋めることである、都（2000）の、b喚起（丁寧語による喚起）などは、言語及びその言語の持つ特徴が影響しているのではないだろうか。

また、以上の研究で機能として提示されているCSに、Gumperz（1982）の、①引用、③感嘆、⑤メッセージの明確化、スイリポーン（2003）の、②話し手内面表示機能、⑥談話調整機能…などがある。このようなCSは上記の先行研究で提示した要因では説明できない。ではこのようなCSを引き起こす要因は何だろうか。

本研究では、Gardner-Chloros(1991)の枠組みとイヤムポーンサイ・スイリポーン（2003）の枠組みを利用し言語選択とCSの影響する新たな枠組みを作成し分析を行なう。詳細は第3章の分析枠組みで述べる。

¹² CSの進行方向：台湾語をベースとする中国語へのCSは、台湾語から中国語への方向である。

¹³ 一方進行CS：2言語が相互的にCSすることなく、1つの言語からもう1つの言語へ一方向的にCSすること

第3章 研究概要と枠組み

本章では、本研究の位置付けと研究目的、研究方法、分析枠組みを同順に述べていく。

3.1 本研究の位置付けと研究目的

第2章で述べたように、これまでの言語選択とCSに影響する要因に関する研究は言語選択に関するものが多く、言語選択とCSに影響する要因は主に、「参加者の属性」、「状況」、「話題」などがあるとされ、それぞれの検証を目的として多くの研究が行なわれてきた。また研究方法は主にインタビュー調査と質問紙調査の形式であり、実際の会話をデータとした研究は少ない。しかし、バイリンガルは無意識的にCSを行う場合が殆どであり、回答に当たって、その報告は実際とは異なる可能性が考えられる。また実際の会話を見ることで、話者の細かい心境と意図、CSする言語とCSされる言語の微妙な差異がCSに及ぼす影響を見ることができると考える。また、談話を構成していく中での自己調整と対話者とのインタラクション機能によるCSもより明確に捉えることができるだろう。

本研究では、朝鮮語・中国語・日本語の3言語を自由に使える朝鮮族の自然会話をデータとし、会話内CSを引き起こす要因に焦点をあて、先行研究で多く取り上げられてきた「参加者の属性」、「状況」をほとんど同一に設定する。そして、先行研究では注目されてこなかった「言語の特徴」に注目し、「言語上の要因」と、「機能上の要因」を探ることを目的とする。

また、朝鮮語から中国語へ、朝鮮語から日本語へというCSの方向性と、「言語の特徴」による切り替えが会話全体にどのような効果をもたらすのかを考察し、バイリンガルのCSは言語の資源をその場その場に応じて巧みに活用するコミュニケーション能力であることが示唆されることを期待する。

本研究では、以下の2点を研究課題とする。

朝鮮語を優位とし、朝・中・日3言語を併用する朝鮮族の自然会話におけるCSに注目し、

課題1：CSを引き起こす要因を量的に探る

- 1.1 言語上の要因
- 1.2 機能上の要因

課題2：CSを引き起こす要因を質的に探る

- 2.1 言語上の要因
- 2.2 機能上の要因

3.2 研究方法

本節では、協力者のプロフィールとデータの収集方法、調査期間、分析の視点、文字化記号の説明の上記の順に述べる。

3.2.1 協力者

本研究の協力者は、日本の文系大学、もしくは文系で学んでいる、あるいは学んだことのある中国の朝鮮族である。そして、いずれも家庭内言語は朝鮮語、高校までは朝鮮族民族学校で学び、中国で短期大学又は大学を卒業した朝鮮語を優位とする朝鮮族という条件を満たしている。協力者は事前に朝鮮族 15 人に簡単な質問紙調査を行い、その中から言語能力、言語背景、言語好み等の面でほとんど一致する 5 人に決定した。協力者のプロフィールは「表 3」の通りである。

表 3 協力者（分析対象）のプロフィール

協力者	年齢	性別	3 言語能力	所属	滞日期間	家庭言語	学校言語
A	20 代後半	女	朝>中>日	大学院生	3 年	朝鮮語	朝鮮語
B	20 代後半	女	朝>中>日	大学院生	4 年	朝鮮語	朝鮮語
C	20 代後半	女	朝>中>日	大学院生	4 年	朝鮮語	朝鮮語
D	20 代後半	女	朝>中>日	大学生	5 年	朝鮮語	朝鮮語
E	30 代前半	女	朝>中>日	会社員（大学院中退）	5 年	朝鮮語	朝鮮語

本研究の協力者は、上記の「A~E」の 5 人であるが、実際の会話に参加するのは F、G、H（表 4 を参照）を含む 8 人である。F と G も同じく 3 言語を自由に使える朝鮮族であるが、中国語を優位とするため今回は対象外とした。H は協力者と同じ条件を満たしているが、筆者自身であるため対象外とした。なお、筆者は同じ仲間として会話に参加したが、会話の流れは自然なものであり、全データで筆者の参加による影響はほとんど見られなかったと判断する。

表 4 会話参加者（対象外）のプロフィール

参加者	年齢	性別	3 言語能力	所属	滞日期間	家庭言語	学校言語
F	20 代後半	女	中>朝>日	大学院生	3 年	朝・中	朝・中
G	20 代後半	女	中>朝>日	大学生	3 年	朝・中	朝・中
H	30 代前半	女	中>朝>日	大学院生	3 年	朝鮮語	朝鮮語

会話参加者の 8 人の中国での教育背景、言語環境などは少し異なっているが、日本にきてからは生活、教育、社会的な面で類似したステップを踏んでおり、似た経験を持つ仲間同士である。

3.2.2 データの種類と収集方法

本研究では、質問紙調査、自然会話録音、フォローアップ・インタビュー 3 段階に分けてデータを収集した。上記の順に説明していく。

3.2.2.1 質問紙調査

本研究では協力者の選定に先立って簡単な質問紙調査を行なった。質問項目は全 28 項目で、朝鮮語伝承意識-3 項目、言語背景-4 項目、言語イメージ-3 項目、3 言語能力-11 項目、言語の好み-4 項目、言語の使い分け-3 項目及び自由記述で構成されている。質問紙は、任榮哲（2003）の質問紙を参考に作成した。質問紙は主に協力者を定めるために用い、分析の際には参考程度に留める。

3.2.2.2 自然会話収集

データ： 自然会話録音 全 4 回で約 12 時間

収集期間：2005 年 4 月～8 月にかけて 4 回

場面：データ I、II、III は筆者の自宅でホームパーティー形式、一回 4、5 名、毎回約 2～4 時間の会話を録音した。

データ IV は、友人同士 3 人が学校の教室で食事しながら雑談する会話を約 2 時間録音したものである。

設定：①本研究の目的が朝鮮族の言語生活であることだけを伝え、普段の話し方で好きなように話すことを求めた。

②自然な会話を取るため、トピックなどは設定していない。協力者には研究の一環ということ意識させないよう食事、ホームパーティーの場面に設定した。

対象データ：会話参加者が 8 人であるが、本研究で対象とするのは、「表 3」の A～E、5 人の発話データに限る。これからは研究対象とする参加者 5 人は「協力者」、他の会話参加者は「参加者」と呼ぶ。

3.2.2.3 フォローアップ・インタビュー

上記 3-2-2-2 の協力者を対象とし、フォローアップ・インタビューを行なった。データを取った翌日全体的な質問をメールで行い、また、データを文字化し分析する際、確認が必要だと判断した箇所と協力者の普段の言語使用は、文字化したデータを見せながら対面形式でインタビューを行なった。本研究では、フォローアップ・インタビューを分析の際の参考として扱う。

3.2.3 分析の視点と文字化記号の説明

本節では、発話文の認定、CS の認定の原則と、文字化記号の説明について述べる

3.2.3.1 発話文の認定

本研究では、宇佐美（2002）の基本的な文字化の原則に従い、「発話文」の定義を、「会話という相互作用の中において、『文』をなしていると捉えられるもの」を「一発話文」とする。なお、「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話も話者が交替

した場合は、「一発話文」として認める。また、相槌は、話者が交替した場合のみ「一発話文」と認める。

3.2.3.2 CS の認定

CS としてカウントする際、以下のルールに従う

- (1) 同一話者が一つの言語での発話中に、もう一つの言語を使用する場合
- (2) 同一話者が直前の発話で使用した言語と異なる言語に切り替えた場合
- (3) 相手の使用言語とは違う言語に切り替えた場合
- (4) 相手の使用言語とは同じでも、自分が直前まで使っていた言語とは異なる場合
- (5) 同じテーマが話されている最中に、重複して CS される場合は一回の CS としてカウントし、それ以上はカウントしない
- (6) 相手とずっと異なる言語で話し続ける場合は CS として認めない

3.2.3.3 文字化記号の説明

3.2.2.2 で録音した自然会話を、以下の記号を用いて文字化した。

アルファベット：話者 (A~E：研究協力者、F~H：会話参加者)

？：疑問文につける

< >：<笑う>、<笑いながら>、<お酒を注ぐ>等の状況の説明

↑→↓：上昇↑、平板→、下降↓などのイントネーションの説明

…：省略

「 」：誰かの発話を引用する際

『 』：自分の発話を引用する際

()：短い意味のない相槌は () の中に入れる

3.3 分析枠組み

本研究では CS を引き起こす要因を探ることが目的であり、本研究のデータを分析し「表 4」に示す枠組みを作成した。枠組みの作成には Gardner-Chloros (1991) の影響要因の枠組みと、イヤムポーンサイ・スィリポーン (2003) の CS の機能の枠組みを参考にした。また、本研究の協力者の言語背景の複雑さからこの二つだけの枠組みでは説明できない部分もあり、東 (1997) と都 (2000)、Hoffman (1991) の枠組みも一部を取り入れた。さらに、「言語の特徴」に焦点をあてた研究はまだ見当たらないため、「言語の特徴」による CS は日本の大学院で言語を専攻している大学院生 3 名 (朝・中・日 3 言語のできる朝鮮族 2 名、朝鮮語と中国語ができる日本語母語話者 1 名) に協力してもらい各要因の分類やネーミングを決定した。

本研究での CS を引き起こす要因の枠組みは、Gardner-Chloros(1991)の影響要因と、イヤムポンサイ・スィリポン (2003) の CS の機能、両方違う視点から見たものを援用して作成したものである。それについて説明する。CS を引き起こす要因を原因と見ると、CS の機能は原因がもたらした結果となる。この原因と結果は重なる場合が多い。例えば、結婚適齢期を過ぎている娘が友人と日本語で話す際、母親の話はそのまま朝鮮語で話した。

例：「お母さんは私が家に帰るたびに『いつ結婚するつもりなの (朝鮮語)』というの。」この発話で、娘は母親の朝鮮語を「引用」し、口調まで真似しながら友人に話している。この場合、母親の発話をそのまま「引用」しようとする娘の意図が CS を引き起こす要因となる。また、「引用」はその場を生き生きさせようとする機能を果たしている。つまり、ここでの「引用」は CS を引き起こす要因となると同時に、その CS が果たす機能にもなる。すべての要因と機能が表裏一体ではないが、本研究では機能でありながら、その機能を果たすための要因となったと考えられるものを、CS を引き起こす「機能上の要因」とみなす。

次は、本枠組み作成の経緯を簡単に記述する。

本研究では、CS を引き起こす要因を [表 4] のように二つに大別され、それぞれを「言語上の要因」と「機能上の要因」と名づけた。そして、それぞれの下位分類としてさまざまなバリエーションが観察された。

本研究の中心となる「言語の特徴」による CS 枠の網掛け部分—「意味領域の違い」、「受身表現」、「曖昧な表現」、「決まり文句」、「オノマトペ」、「敬語使用回避」、「論議の便宜さ」—はこれまで CS を引き起こす要因として言及されたことがなく、本研究で初めて提示する項目である。他方、固有名詞、CS される言語特有の名詞による「語彙の必要性」と、「気持ち・感情の表示」、「表現の簡潔さ」などは多くの先行研究で言及されている項目である。本研究では、各言語が持っている特徴によるものと、言語の使い手の言語能力によるものを同じく言語と関わるものとして「言語上の要因」の枠組みに分類した。

次は、談話を効果的に進める道具としての要因、対話者とのかかわりの中での伝達に必要な要因、話者が自分の準拠する社会集団との内的連帯や帰属意識を表示するアイデンティティ表示という 3 つの要因をその機能を果たす要因とみなし、「機能上の要因」の枠とした。「機能上の要因」については、先行研究で CS の機能として多く取り上げられているが本研究では視点を結果ではなく原因に置くことで要因として分析する。

次いで、先行研究では見られたが、本研究では見られなかった要因を簡単に説明する。本研究では、言葉の不足、母語で思い出せないなどの補償的要因による CS は見られなかった。その理由としては、本研究のデータとなる会話は、主に母語の朝鮮語で、日常的な会話が行なわれていたため、補償とみられるものがなかったと考えられる。また、特定会話の特徴として個人的か客観的か、ユーモラスな影響、イデオロギーの提示、回避戦略、修正戦略5項目を挙げているが、本研究では見られなかった。

本研究の「分析枠組」と各項目についての定義は「表 5」に示している

表5 分析枠組みと定義

影響要因	定義
1 言語上の要因	言語自体の特徴と、両言語における使い手の能力など、言語と関わる要因
1.1 言語特徴	CSされる言語がCSする言語にはない特徴を持っている場合
(1) 語彙の必要性	固有名詞・呼称、又はCSされる言語特有の名詞の使用
(2) 意味領域の違い	似たような意味を持つ言葉はあるが、ニュアンス又は意味範囲が違う
(3) 気持ち・感情の表示	自分の気持ち・感情を表しやすい形容詞や感嘆詞がある
(4) 受身表現	働きかけられる立場を示すことができる
(5) 曖昧な表現	意思をはっきり表明しない、または和らげて表現できる
(6) 決まり文句	日常生活で習慣的に使われる挨拶言葉がある
(7) オノマトペ	視覚的、聴覚的などの表現によりイメージを伝える
(8) 表現の簡潔さ	構造からも文字数からも簡潔に表現できる
(9) 敬語使用回避	敬語のない言語の使用で敬語の使用を回避できる
(10) 論議の便宜さ	機能語が少なく簡単明瞭で論議しやすい
1.2 聞き手の言語能力	聞き手のある言語の能力が足りないことで、話者が聞き手の得意とする言語に合わせて発話したり、説明したりする場合
2 機能上の要因	談話調整、相互作用、アイデンティティの表示など機能的な要因
2.1 談話調整	談話を円滑且効果的に進めたり、談話の構造や運営に関わる役割を果たしたりする場合
(1) 引用	引用部分を明示し、話を生き生きさせる場合
(2) 強調	発話の意図をより強く表現する場合
(3) 繰り返しによる明確化	相手の言っていることをそのまま、あるいは少し変化をつけてもう一つの言語で繰り返すことでよりはっきりさせる場合
(4) 繰り返しによる強調	自分の言った言葉をそのまま、あるいは少し変化をつけてもう一つの言語で繰り返すことで強調を示す場合
2.2 相互作用	相手とのかかわりや発話内容に対する話者の意図が相手に伝えられる場合
(1) 相手発話への関与	相手の発話に参加したり、関わったりすることで関与を示す場合
(2) 相手発話へのコメント	相手の発話に自分のコメントや評価を示したり感想を言ったりする場合
(3) 理解・不理解の表示	相槌などで相手の発話に対する理解や不理解を示す場合
2.3 アイデンティティ表示	ある言語を選択することで自分の準拠する社会集団との内的連帯や帰属意識を確認し、自分の情緒や感情、性向や態度を表明する場合
(1) デュアルアイデンティティ	文の最後に単語、あるいは短い語尾のスイッチで自分達は2つの社会に属しているのだということを確認する場合
(2) 仲間意識の表示	同じグループ内の人しか通じない言葉を使用することで仲間意識を表示する
(3) 習慣の表示	母語にあるにも関わらず、日常的によく使う言葉をそのまま他の言語で話す場合

第4章分析の結果と考察

本章では、量的・質的 2 種類の方法で分析した結果を述べる。第 3 章で設定した課題は以下の通りである。

朝鮮語を優位とし、朝・中・日 3 言語を併用する朝鮮族の自然会話における CS に注目し、

課題 1 : CS を引き起こす要因を量的に分析する

1.1 言語上の要因

1.2 機能上の要因

課題 2 : CS を引き起こす要因を質的に分析する

2.1 言語上の要因

2.2 機能上の要因

以下、課題ごとに分析結果を述べる。但し、研究課題 1 で知り得る分析結果については全体的な傾向について考察し、詳しくは研究課題 2 で実例と合わせて項目ごとに考察することにする。

4.1 量的分析の結果と考察

本節では、各要因により引き起こされる CS を量的に分析する。

3.2.2 で述べたとおり収集したすべてのデータを文字化し、CS パターンを分析した結果、朝鮮語・中国語・日本語 3 言語を併用する協力者の CS パターンは「表 6」の通りである。朝鮮語をベースとする会話で、中国語に CS したのは 393 箇所、日本語に CS したのは 994 箇所；中国語をベースとする会話で、朝鮮語に CS したのは 4 箇所、日本語に CS したのは 12 箇所；日本語をベースとする会話で、朝鮮語に CS したのは 10 箇所、中国語に CS したのは 5 箇所、全 1418 箇所の CS が起きている。本研究では、CS される前に話されていた言語、又は母体となる言語をベース言語とし、交替される言語と母体となる言語に埋め込まれる言語を CS される言語とする。

表 6 朝鮮語・中国語・日本語それぞれをベースとする CS

ベースとする言語	CS の方向とその数		計 (%)
朝鮮語	朝→中 : 393	朝→日 : 994	1387 (97.8)
中国語	中→朝 : 4	中→日 : 12	16 (1.1)
日本語	日→朝 : 10	日→中 : 5	15 (1.1)
全体			1418 (100)

本研究で対象とするのは、朝鮮語をベースとする会話で、中国語に CS した 393 箇所と日

本語に CS した 994 箇所を合わせた 1387 箇所の CS のみである。つまり全 1418 箇所起きている CS のうち、97.8%に達する朝鮮語をベースとする CS のみを対象とし、第 3 章で作成した枠組みに沿って分析する。客観性を期すため、全データの約 30%を日本の大学院で言語を専攻している朝鮮族 2 名に依頼し、一致率作業を行なった。筆者と 2 人の結果を照らし合わせた結果、約 83%の一致率であった。不一致部分については、協議を行ったところ 96%以上が合致した。一致率作業の全過程で、朝鮮語は上級レベル、中国語は初級レベルの日本語母語話者に参加してもらい、日本語においては日本語母語話者の視点を反映するようにした。その結果を「表 7」と「表 8」にまとめる。

本研究では、自然会話の中で朝鮮語から中国語、朝鮮語から日本語への CS をカウントし、各要因による CS 方向の傾向をみるのが目的であり、数値的に比較することを目的としているわけではない。

4.1.1 言語上の要因による CS

本研究では、「言語上の要因」による CS は、「言語の特徴」と「聞き手の言語能力」が観察され、「言語の特徴」による CS は、朝鮮語から中国語への CS が 217 箇所、朝鮮語から日本語への CS が 320 箇所全部 537 箇所できている。「聞き手の言語能力」による CS は朝鮮語から中国語への CS のみ 6 箇所起きている。

表 7 「言語上の要因」による CS

影響要因	朝→中	朝→日	計
1.1 言語特徴	217	320	537
(1) 語彙の必要性	43	177	221
(2) 意味領域の違い		45	45
(3) 気持ち・感情の表示	4	26	30
(4) 受身表現		4	4
(5) 曖昧な表現		12	12
(6) 決まり文句		13	15
(7) オノマトペ	1	19	20
(8) 表現の簡潔さ	163	24	187
(9) 敬語使用回避	2		2
(10) 論議の便宜さ	3		3
1.2 聞き手の言語能力	6		6

「表 7」から分かるように、「言語上の要因」による CS は、その方向が朝鮮語から中国語へ、あるいは朝鮮語から日本語へと一方向的なものが多いことが分かる。詳細は以下の通りである。

「言語の特徴」による CS をさらに 10 項目に細分化すると、「語彙の必要性」は中国語へ 44 箇所、日本語へ 177 箇所；「意味領域の違い」は日本語へ 45 箇所；「気持ち・感情の表示」は中国語へ 4 箇所、日本語へ 26 箇所；「受身表現」は日本語へ 4 箇所；「曖昧な表現」は日本語へ 12 箇所；「決まり文句」は日本語へ 13 箇所；「オノマトペ」は中国語へ 1 箇所、日本語へ 19 箇所 CS を引き起こしている。また、「表現の簡潔さ」は中国語へ 163 箇所、日本語へ 24 箇所；「敬語使用回避」は中国語へ 2 箇所；「論議の便宜さ」は中国語へ 3 箇所 CS を引き起こしている。

ここで分かることは、「言語の特徴」による CS で、「意味領域の違い」、「気持ち・感情の表示」、「受身表現」、「曖昧な表現」、「決まり文句」、「オノマトペ」などの要因は、朝鮮語から日本語へと一方向進行的な CS を引き起こす傾向が強く、「表現の簡潔さ」、「敬語使用回避」、「論議の便宜さ」などは、朝鮮語から中国語へと一方向進行的な CS を引き起こす傾向が強い。

台湾語・中国語バイリンガルの CS を観察した陳麗君 (2001) は、一方向進行 CS を言語の性格や特徴を発話に反映したものと指摘している。そして本研究でも同様の傾向が見られた。一方向進行 CS から反映された「受身表現」、「曖昧な表現」、「決まり文句」などの日本語の特徴、また「表現の簡潔さ」、「敬語がない」などの中国語の特徴は、日本語と中国語の両言語を操れる者なら誰もが知っている特徴であろう。このような自分が知っている言語のそれぞれの特徴を意識し、そこに焦点を当てて CS する行為は Gumperz (1982) が指摘したように、バイリンガルは、CS において自分が持っている言語知識を資源として使用しているということが裏付けられたと言える。

このような一方向進行 CS が多く出現したのは、言語の特徴が要因で CS が引き起こされることを支持している。各項目についての詳細な考察は、後述する質的記述 (p 24、4.2.1) で行うこととする。

また、聞き手の言語能力による CS は、朝鮮語から中国語への一方向進行の CS のみで、本研究で分析対象とする協力者が話者で、分析対象としない参加者が聞き手である場合のみで起きている。これは、朝鮮語を優位言語とする協力者の中国語能力と中国語を優位とする参加者の中国語力の差がそれほど大きくないことに比べ、協力者の朝鮮語能力と参加者の朝鮮語能力の差は大きいことが原因として考えられる。朝鮮語を優位とする協力者が話者で、朝鮮語を優位としない参加者が聞き手になる場合には、話者が聞き手の得意とする中国語に CS して話す。このように相手の言語能力に合わせて相手を配慮したり、聞き手を特定したりする現象は Gumperz (1982) などの研究でも観察されている。

4.1.2 機能上の要因による CS

「機能上の要因」による CS は、「談話調整」、「相互作用」、「アイデンティティ表示」という三つの要因が観察された。「談話調整」による CS は朝鮮語から中国語へ 26 箇所、中国語へ 166 箇所；「相互作用」による CS は中国語へ 22 箇所、日本語へ 34 箇所；「アイデンテ

「アイデンティティ表示」による CS は中国語へ 117 箇所、日本語へ 248 箇所起きている。

「表 8」から分かるように、「機能上の要因」による CS は、朝鮮語から中国語にも、日本語にも CS する両方向的なものが多いことが分かる。詳細は以下の通りである。

表 8 「機能上の要因」による CS

影響要因	朝→中	朝→日	計
2.1 談話調整	26	166	192
(1) 引用	7	86	93
(2) 強調	10	66	76
(3) 繰り返しによる明確化	4	5	9
(4) 繰り返しによる強調	5	9	14
2.2 相互作用	22	34	56
(1) 相手発話への関与	6	7	13
(2) 相手発話へのコメント	8	18	26
(3) 理解・不理解の表示	8	9	17
2.3 アイデンティティ表示	117	248	565
(1) デュアル・アイデンティティの表示		3	3
(2) 仲間意識の表示	17	138	155
(3) 習慣の表示	100	307	407

「機能上の要因」による CS を詳細に見ていくと、「談話調整」で、「引用」は中国語へ 7 箇所、日本語へ 66 箇所；「強調」は中国語へ 10 箇所、日本語へ 66 箇所；「繰り返しによる明確化」は中国語へ 4 箇所、日本語へ 5 箇所；「繰り返しによる強調」は中国語へ 5 箇所、日本語へ 9 箇所；CS を引き起こしている。「相互作用」で、「相手発話への関与」は中国語へ 6 箇所、日本語へ 7 箇所；「相手発話へのコメント」は中国語へ 8 箇所、日本語へ 18 箇所；「理解・不理解の表示」は中国語へ 8 箇所、日本語へ 9 箇所 CS を引き起こしている。また、「アイデンティティ表示」で、「デュアル・アイデンティティの表示」は日本語へ 3 箇所；「仲間意識の表示」は中国語へ 17 箇所、日本語へ 138 箇所；「習慣の表示」は中国語へ 100 箇所、日本語へ 307 箇所 CS を引き起こしている。

以上から、機能上の要因による CS は、「引用」、「強調」、「デュアル・アイデンティティ」、「仲間意識の表示」、「習慣の表示」が中国語への CS より日本語への CS が多いほか、「繰り返しによる明確化」「繰り返しによる強調」「相手発話への関与」「相手発話へのコメント」「理解・不理解の表示」は、朝鮮語から中国語、朝鮮語から日本語、両方向への CS がほぼ同数であることが分かった。

「引用」、「強調」、「仲間意識の表示」、「習慣の表示」による CS は朝鮮語から日本語への CS がはるかに多く起きている。今回の会話の内容が日本での日常生活と留学生活、アルバ

イトでのエピソードなどが多かったことがその原因として考えられる。デュアル・アイデンティティは朝鮮語から日本語への CS は3箇所できているが、中国語への CS は起きていない。これは朝鮮語と日本語がともに SOV 語順であり、構造的にも似ているが、その一方、中国語は SVO 語順であり、機能語もなく、まったく異なった統語構造をしていることが原因として考えられる。

また、「繰り返しによる明確化」、「繰り返しによる強調」、「相手発話への関与」、「相手発話へのコメント」、「理解・不理解の表示」など、相手との関わりを確認しあう機能を果たす CS は、言語、話題などと関係なく起きていると考えられる。

各項目における詳細な考察は、後述する質的記述のところ (p35、4.2.2) で述べる。

4.2 質的分析の結果と考察

前節の量的分析の結果から、各要因による CS の出現数と、その CS する方向が一方向的なものや両方向的なものがあることが明らかになった。本節では、実例を挙げながら、各要因により引き起こされた CS と、その方向が示すものを詳しく記述し、考察していく。

4.2.1 言語上の要因による CS

本研究では、協力者の朝・中・日3言語能力、3言語の好み、言語背景などがほぼ同じレベルであるため、言語上の要因は主に、「言語の特徴」と会話参加者である「聞き手の言語能力」で観察された。

4.2.1.1 言語の特徴

今まで「言語の特徴」を、CS を引き起こす要因として取り上げた研究は管見の限り見当たらない。そして、今までの研究では、アンケート調査と質問紙調査、インタビューなどの研究方法を取ったものが多く、そのため、このようなマクロ的な研究方法で各言語の特徴、つまり言語と言語の差異などミクロ的な要因は観察できないと考えられる。本節では自然会話のデータで観察された、10項目の言語特徴による CS を「語彙の必要性」、「意味領域の違い」、「気持ち・感情の表示」、「受身表現」、「曖昧な表現」、「決まり文句」、「オノメトペー」、「表現の簡潔さ」、「俗語引用」、「敬語使用回避」、「論議の便宜さ」の順に実例を提示しながら分析していく。

また、前節の研究課題1の分析結果で明らかにされた CS の方向性を各言語の特徴を裏付ける材料として用いながら解析していく。

(1) 語彙の必要性

本研究で、必要とする語彙というのは、固有名詞・呼称など、ある一つの言語にしかないもの、また、ある言語特有の名詞で他の言葉では説明しにくいものを指す。

① 固有名詞・呼称：

会話例 1 (朝鮮語→日本語)	(訳)
(1) B : 나는 秋葉原까지 왔는데 이 언니는 아직 新宿데	(1) B : 私は秋葉原まで来たのに、このお姉ちゃんはまだ新宿だつて
(2) C : 근데 그 선생하고 奥さんは 일본사람이니까	(2) C : だけど、あの先生と奥さんは日本人だから

会話例 1 は、「秋葉原」、「新宿」、「奥さん」などの固有名詞・呼称を本来の言語で言うため、日本語への CS を引き起こしている。

② CS される言語特有の名詞

会話例 2 (朝鮮語→中国語)	(訳)
→D : 중국말은 병음으로 쳐 아니면 五筆로 쳐? A : 五筆 안 쳐	→D : 中国語は拼音でタイピングする、 五筆で打つ? A : 五筆使わない

会話例 2 は、中国語のタイピングについて話している場面で、朝鮮語で話している途中、「五筆」という中国語に切り替えているが、この「五筆」というのは、中国語の漢字を分解して入力する中国語独特の入力方法であり、朝鮮語と日本語では説明しがたいものである。

このように、朝鮮語をベースとする会話の中では、固有名詞・呼称、CS される言語特有の名詞などが埋め込まれた語彙レベルの CS が頻繁に観察された。本研究のデータで観察された語彙を種類別にまとめて見ると以下(表 9)のとおりである。

表 9

項目	中国語	日本語
会社名、学校名	工业学院, 吉大	朝日新聞、サイゼリア
電車線路名		JR 総武線、中央線、丸の内線
呼称	老太太	奥さん、彼氏、お子さん
中国特有	希望工程、五筆字型、酸菜、酱茄子、糖醋、茄子盒	
日本特有		不登校、別科生、門限、お土産、宅急便、お盆休み、C-メール

Nishimura(1995), スイリポーン(2003)は、このような語彙レベルで埋め込まれる形で引き起こされる CS を、語彙のギャップを埋めるための補償的機能を果たすものとして捉えている。また金(2003)は、「在日コリアン一世における両言語の混用には、いろいろな要因が

絡み合うが、とりわけ、両言語の習得度と文化的要因が大きく関わっている」と述べている。他方、こうした視点とは違って、Saville-Troike(1982)、Gardner-Chloros(1991)らは、「語彙の必要性を反映するCS」と定義している。本研究で頻繁に観察された固有名詞と特有名詞へのCSは、協力者が優位とする朝鮮語から第2あるいは第3の言語である中国語と日本語へのCSであり、母語の朝鮮語能力が足りないことでも、中国語と日本語の習得度が足りないことでもないとするのが自然であろう。本研究では、協力者が自分も相手も理解している、中国語と日本語及びそれに含まれている文化的意味もそのままを示したいとする「語彙の必要性」がCSを引き起こす要因として反映されていると考える。

また、前節の量的分析の結果を示した「表5」からも分かるように、日本語へのCSが全体として多く177箇所観察され、中国語へのCSの43箇所より格段と多かった。この原因としては、協力者が現在、日本で生活しており、普段の生活の中でも日本と関連した話題が多いことが考えられる。

(2) 意味領域の違い

本研究では、「優しい」、「冷たい」、「落ち着かない」、「悔しい」、「希望」、「ぶつかる」などの形容詞及び形容詞に準じる語彙にCSした例が多く観察された。このような語彙は、朝鮮語にも同じような意味を持つ言葉はあるが、ニュアンスが違うか、又は意味範囲が違っており、一対一の対応を持たない場合が多い。

会話例3 (朝鮮語→日本語)	(訳)
(1)B: 야네 엄마 굉장히 優しい 해 가면 언제나 커피랑 이렇게 타놓고...	B: 彼のお母さんすごく 優しい の、行くといつもコーヒー入れてくれたり...
(2)E: 그래도 다행이네. 일본사람 찾아가 冷たい 한 사람 만났으면 어떡하니	E: でもよかったね、 冷たい 日本人に出会ったらどうするの

スイリポーン(2003)は、タイ人留学生の会話で観察された同じような例を「母語にない」「母語ですぐ思い出せない」から日本語を使って補償すると述べているが、他方、都(2000)は、「一対一の対応を持たない両言語間の語彙体系も切り替えに反映される」と述べている。＜言語の意味範囲の違い＞を日本語の「優しい」を例に説明すると(図1)、日本語の「優しい」は、朝鮮語で「부드럽다, 상냥하다, 친절하다」の3つの意味を持っており、中国語ではほぼ朝鮮語と一対一で対応する「柔和, 和蔼, 亲切」3つの意味を持ってある。もし、日本語を習得する前に使用していた朝鮮語の「친절하다」を「優しい」の代わりに使うと「親切だ」という少しニュアンスの異なった意味になり、日本語を習得し「優しい」の意味が分かった段階では、「優しい」の意味が完全に伝わっていないような違和感を持つことになる。

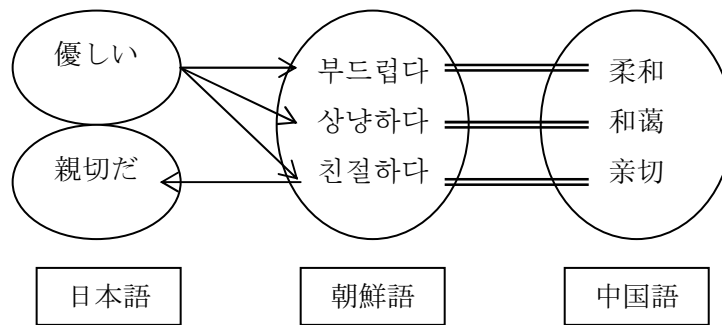


図1 朝鮮語と中国における「優しい」の意味範囲

このような両言語の意味領域の違いによるCSは、朝鮮語から日本語への一方向進行のみで観察された。その理由として、朝鮮語と中国語と、朝鮮語と日本語の歴史的関係が挙げられるであろう。朝鮮語は中国の中の少数民族の言葉の一つとして150年の間、「漢語」、「満語」、「日本語」などの影響を多く受けてきた。その中でも中国の言語政策によって民族言語教育に漢語を多く取り入れたりした時期もあり、漢語の影響をもっとも受けて来たと言える。その影響を金東蘇ら(1994)は、①中国語の借用②中国語との併用③中国語の干渉④混合語の発生⑤言語の同化の5つにまとめて提示している。また、朝鮮語は中国語とほぼ同じ社会的・歴史的環境の中で共に変化を受けてきたため、両言語のバイリンガルにとってそれほど意味範囲の違いを感じない語彙が多い。それに対し、日本植民地など歴史的背景から朝鮮語は日本語の影響も多く受けてきたが、それは一時期、一部の名詞に留まり、朝鮮語と中国語、そして日本語は、それぞれ違う文化の中で変化し、意味領域が違う語彙が多く存在していると考えられる。本研究では、朝鮮語・中国語とは違う意味領域を持つ語彙が多いことを日本語の特徴の一つとし、CSを引き起こす要因とみなした。

(3) 気持ち・感情の表示

今回のデータで、自分の気持ち・感情を表す際、日本語の形容詞や感嘆詞に切り替えて表現した場合が24箇所も観察された。会話例4で示した「美味しそう↑」「うそ↑」のようにイントネーションを高くしながら気持ちや感情を表現する例は、中国語では「哇，好帅呀（わー、本当素敵だわ！）」など4箇所で見られた。しかし、朝鮮語でこういう感情表現をした例は「맛있다（美味しい）」の1箇所で見られなかった。

会話例4 (朝鮮語→日本語)	(訳)
(1)H: 이거 좀 달다 들고 먹기는 좋아도 →A: 美味しそう↑	H: これちょっと甘い、食べやすいけど →A: 美味しそう↑

(2) F : 삼십? <J を見ながら聞く> H : 내 서른둘 → D : うそ↑ 언니 중국나이로 서른들이지	F : 30? <J を見ながら聞く> H : 私? 32 → D : うそ↑ 姉ちゃん中国の歳で 32 でし よう
---	---

服部(2001)、陳(2001)では、驚きや感嘆などの気持ちは母語で表される場合が多いことが指摘されている。しかしスイリポーン(2003)では、タイ人留学生の場合は日本語にCSされ表現される例文が多く観察され、「それは、タイ人留学生は相手に自分の内面で思っていることを語る時、タイ語より日本語を使った方が自分の気持ちを表現しやすいと考えられる」と述べている。本研究では、日本語へのCSと中国語へのCSが共に起きているが、その機能には違いが見られた。日本語へのCSと中国語へのCSは共に、感嘆などより強く気持ちを表現できる言葉にCSすることで、伝えたい気持ちをさらに際立てている点では共通している。そして、日本語へのCSは、日常生活で常に気持ちの表現を言葉にする日本の文化に本研究の協力者が馴染んだ結果として、何らかの感動の表現をしないと相手の期待に反するのではないかというおそれの気持ちから、礼儀のルールが働いていることが推測される。

(4) 受身表現

本研究では、「…言われる」「…聞かれる」など、少ない数ではあるが受身表現に切り替えることで、働きかけられる立場を浮き立たせる例が観察された。

会話例 5 (朝鮮語→日本語)	(訳)
B : 愛知에 있는 친구한테 誘われてるん けど 내가 지금 취직 바쁘다 논문 바쁘다 그냥 핑계만 대고 있는데	B : 愛知にいる友達に 誘われてるんだけど 私は今就職で忙しい、論文で忙しいって 言い訳ばかり言っているところなの

この会話は、[B]が愛知県の友達に愛知万博に遊びに来てほしいと誘われているが時間がないということを書いて断っている場面である。もし[B]が日本語にCSしないで朝鮮語で言い続けると、「友達が遊びにきてといっているんだけど」という表現になる。だが、日本語の受身に切り替えることによって、「誘われているが、忙しい」という相手からの働きかけと、それに答えられない自分の忙しさを対照してスムーズにつなぐことができると考えられる。なお、受身表現によるCSは先行研究では言及されたことがない。

本研究で、「受身表現」によるCSは朝鮮語から日本語への方向のみ4箇所観察された。その理由として、朝鮮語には「受身表現」がないため、主題を自分以外の人に転嫁し、自分は働きかけられている立場であることを示したい場合は「受身表現」を持っているほかの言語にCSで対処しようとするのが考えられる。しかし、中国語には「被」という言葉

を入れて受身的な文章に変えることはできるが口語ではめったに言わない堅苦しい言葉であるため、受身表現をよく使うという特徴を持っている日本語へCSしたと考えられる。

(5) 曖昧な表現

本研究では、「…かも」「多分…」「…わからないけど」のような日本語特有な曖昧な表現にCSすることで、相手に伝えようとするメッセージの力を緩和したり、または間接的に表現したりとした例がしばしば観察された。

会話例 6 (朝鮮語→日本語)	(訳)
→B: 언니 공부해는거 보래 나는 이런것도 없다, 우리집에 이거 뭐야 书架가 있잖아 ほこりだらけかも	→B: お姉ちゃん勉強するのを見てみ、私 はこういうものないよ。うちの本棚は ほこりだらけかも
H: 나도 뭐 책만 가뜰 갖다놓고 본건 얼마 돼지도 않아	H: 私も本はいっぱい置いといてもあま り見てないの

この例では、「B」が「H」のたくさんの本が整理されている本棚を見て話している場面である。ここで、「B」が朝鮮語で「お姉ちゃん勉強するのを見てみ、私はこういうものないよ。うちの本棚は」と話していたが、「ほこりだらけかも」というところで日本語に切り替えている。[B]がここで伝えようとするのは「本棚のほこり」ではない、彼女は「かも」という言葉を使って、自分は本棚を見てもないからほこりがあるかどうか知らないと自分が勉強をしてないことを伝えている。[H]は[B]の伝えようとする意味を察し、「私もあまり見てないの」と話している。ここでは、自分が本当に伝えたい内容を曖昧な表現を使って間接的に表現していることが窺われる。

曖昧な表現に切り替えることで伝えようとするメッセージの力を緩和するという機能は今まで言及されたことはないが、Kozio1(2000)は、アメリカにおけるスペイン語と英語のバイリンガルに対するインタビュー調査で、被験者がより丁寧で優しいスペイン語に意識的に切り替えることでメッセージの力を緩和しようとする例が観察されたと述べている。

「曖昧な表現」によるCSも、朝鮮語から日本語への方向のみ12箇所観察された。日本語を知っている、または話せる人に日本語の特徴を聞いて見ると、真っ先に挙げられるのが「曖昧な表現」であろう。それに比べて朝鮮語と中国語はストレートに話す傾向がある。本研究の協力者[E]はフォローアップ・インタビューで、日本での生活に慣れていくにつれ、「何事もはっきり言わなくてもいい」、「少し曖昧に言ったほうが相手を傷つけなくて済む」などの考え方を持つようになり、意識的に曖昧な表現を使う場合があると自分の言語行動を振り返り、述べていた。

(6) 決まり文句

本研究では、よその家に訪ねたときに「お邪魔します」、食事を始まる前に「いただきます」、人を見送るときに「気をつけてね」、また「ありがとう」、「ごめんなさい」な

ど日本での生活では日常的に使われている慣用的な挨拶言葉が、日本語のまま多用されていることが観察された。

会話例 7 (朝鮮語→日本語)	(訳)
H: 언니야 <X と M を連れて家に入る>	H: お姉ちゃん<X と M を連れて家に入る>
→A: <i>お邪魔しまーす</i>	→A: <i>お邪魔しまーす</i>
H: 우리 언니 [X 이름], [M 이름] <笑いながら紹介>	H: 私の姉 [X の名前], [M の名前] <笑いながら紹介>
E: 빨리 와	E: 早く入って

スイリポーン (2003) は、「決まり文句や挨拶言葉は日本での生活をしている中で、自分の日常的な言葉、挨拶言葉となる習慣の表示である」と述べている。勿論、習慣的な使用もあるだろうが、それより、日本では、日常の場面で使う言葉がほぼ決まっていて、この場合は何を言った方がいいのかなどを具体的に自分の状況に即して考える必要がない点に注目したい。例えば、日本語では、「いただきます」、「ご馳走様」など決まった言い方があり、必ず使うことになっているが、朝鮮語と中国語では、人によって言う場合も、言わない場合もある。言うとしても、一々言う必要はあるのかと心理的に負担を感じたり、決まったものがないのでその都度何を言ったらいいのか悩んだりすることがある。このような朝鮮語・中国語の非効率的とも言える面は、日本語の決まり文句に CS することで解消されるのではないだろうか。

「決まり文句」による CS は、「表 5」では、朝鮮語から日本語への CS のみ 13 箇所と記載されているが、実際は中国語から日本語への CS も 2 箇所起きている（本研究の対象外であるため、表 5 には示していない）。このような日本語への一方向的な CS は「決まり文句」が日本語の特徴の一つであり、それにより CS が引き起こされていることを裏付けることができる。

(7) オノマトペ

本研究では、「バラバラ」、「ぎりぎり」、「ピンポン」、「チーン」などの視覚的、聴覚的表現によりイメージを生き生きと伝えるオノマトペが、日本語への CS で多く観察された。このような言葉は朝鮮語にもあることはあるが、日本語ほどいたるところで多く使われているわけではない。日本語への CS が多い原因として、朝鮮語では特別に強調する場合以外はオノマトペがあまり使われないことと、日本での生活場面でよくある現象を描写するには日本語の方がもっと臨場感があるためだと考えられる。また、CS することでそこに聞き手の注意を集める強調の機能も果たすことができる。

会話例 8 (朝鮮語→日本語)	(訳)
(1)C : 우리는 밥을 <u>바라바라</u> 먹으니가 맨날 독상이야	(1)C : 私達はご飯を <u>バラバラ</u> 食べるから いつも一人で食べるの
(2)B : 우리 다 아침에 시간 <u>ぎりぎり</u> 하게 일어나가지고 <u>バイト</u> 가잖아	(2)B : 私達皆朝 <u>ぎりぎり</u> におきて <u>バイト</u> 行 くんじゃない

(8) 表現の簡潔さ

本研究では、「表現の簡潔さ」によるCSがもっとも多く観察されている。下記の例で、[S]は朝鮮語と日本語では[不法滞在]という意味の言葉を、「黑」という一文字の中国語にCSし、非常に簡潔に表現している。また、下記の「運ぶ→搬」、「親戚訪問→探親」などの例以外にも、「タバコを吸う→抽烟」、「仲直りする→和好」など、構造的にも朝鮮語と日本語より簡潔で、効率的に会話を進めていくことが観察された。

会話例 9 (朝鮮語→中国語、朝鮮語→日本語)	(訳)
(1)B : 津田沼에는 겁도 없이, 그 알고 보니 <u>黑</u> 한 사람들 많이 살잖아	(1)B : 津田沼には怖いものしらず、後で聴い たら <u>不法滞在</u> の人が結構住んでるの。
(2)B : 물건은 다 <u>搬</u> 해주는거가?	(2)B : 荷物は全部 <u>運ん</u> でくれるの?
(3)E : 오면 석달이제 일본에 만약에 <u>探親</u> 으로 오면은	(3)E : 来るとしたら3ヶ月だよな、もし日本 に <u>親戚訪問</u> で来たら
(4)E : 중국에는 <u>出稼</u> 기가 많잖아	(4)E : 中国は <u>出稼</u> 기가多いじゃん

Hoffman(1991)は、バイリンガルのCSの機能の一つとして、表現の簡潔さと効率性を挙げている。上記の「表現の簡潔さ」によりCSされたと思われる語彙はいずれも朝鮮語・中国語・日本語どの言語でも表現できるが、朝鮮語で表現すると文字数が多くなるか、一つの語彙では表せないものであることから、中国語、又は日本語で一つの語彙で話せる語彙にCSすることで簡潔に表現していると言える。この「表現の簡潔さ」によるCSは、朝鮮語から中国語へのCSで159箇所、朝鮮語から日本語へは24箇所起きている。ここで注目したいのは、本研究では、全体的に中国語へのCSが少ないにも関わらず「表現の簡潔さ」によるCSでは、中国語への方向がもっとも多く起きているということである。これは中国語の物事を短く簡潔に表現できるという言語の特徴を裏付けることとなり、できるだけ簡潔に、効率的にコミュニケーションを行なおうとする工夫が窺われる。

(9) 敬語使用回避

朝鮮語と日本語には敬語表現があり、目上の人に対しては敬語を使うのが礼儀であるとされている。それに対し中国語は敬語表現がなく、目上の人にも目下の人にも話し方はほ

ば同じである。このような3言語の差異を利用し、朝鮮語から中国語にCSすることで敬語使用を回避する場合は本研究で観察された。

会話例 10 (朝鮮語→中国語)	(訳)
E: 많이 먹어라 응	E: たくさん食べてね
A: 잘 먹겠습니다	A: いただきます
F: 맛있지	F: 美味しいね
A: 응	A: ウン
F: さすが姉ちゃん	F: さすがお姉ちゃん
→A: 你们差几岁呀?	→A: 二人の年の差は何歳?
H: 우리?	H: 私達?
A: 나이차가 얼마?	A: 何歳差があるの?
H: 네살	H: 4歳

この会話は、[H]の自宅で[H]の姉である[E]が作った料理を食べながら、[A]が姉妹である[H]と[E]の年の差を聞く場面である。[H]は[A]より少し年上であるが友達なので、[A]は[H]に普通の会話では敬語を使わない。[H]の姉である[K]は[X]と初対面で年上なので、[A]は[E]に敬語を使用している。しかし、[A]が二人に向かって年の差を聞く際、敬語を使うべきかどうか悩むことになる。その結果敬語のない中国語にCSして二人の年の差を聞いている。[A]の質問に[H]が「私達?」とターンをとった途端、[A]は砕けた朝鮮語に戻って[H]に話している。このような敬語使用を回避するため朝鮮語から中国語に切り替えることは普通の生活でも意識して使っていると、[A]に対するフォローアップ・インタビューで確認された。

これとは反対に、都(2000)は、「在日コリアンには日本語に比べ、韓国語が丁寧度の高い言語で、韓国語を使用することが礼儀正しい言語態度として意識されているので、改まった方への喚起によって丁寧意識の高い言語行動へ喚起される」と述べている。本研究でも、敬語のない中国語の使用から敬語のある朝鮮語にCSしながら敬語表現を使う場面がいくつも見られたが、それは中国語にCSしてからベース言語である朝鮮語に戻ることで起きたのか、敬語使用のために朝鮮語へのCSを喚起したのかがはっきりしないためCSとして扱わない。

(10) 論議の便宜さ

上記の(8)と(9)で述べたように、中国語は朝鮮語・日本語と比べ、簡潔で敬語のない中性的な言葉であり、さらに、機能語が少なく簡単明瞭な特徴から論議に向いている言葉である。したがって、論議を自分に有利に持っていくために中国語にCSすると解釈される場合が本研究ではしばしば観察された。

会話例 11 (朝鮮語→中国語)

(訳)

<p>A : 원래는 어문하고 영어 배워줬는데 두개 하면 어느것도 精하게 못하니까 이제는 영어만</p> <p>F: 영어?</p> <p>A: 응 내 영어도 못하는데</p> <p>F: 영어? あなたすごいね、教えて</p> <p>→A: 干吗讽刺我呀, 刺激我呀</p> <p>F: 不是讽刺, 能教得话想当那什么</p> <p>A: 아니야 초중 2학년이니까</p>	<p>A : 元々は国語と英語教えたけど、二つにするとどっちもしっかり教えられないから、今は英語だけ。</p> <p>F : 英語?</p> <p>A : ウン、私英語もできないのに</p> <p>F : 英語? あなたすごいね、教えて</p> <p>→A : どうして皮肉を言うの、痛いところを刺すの</p> <p>F : 皮肉じゃない、教えられるというのはすごいよ</p> <p>A : そうでもない 中学 2年だから</p>
--	--

これは、[A]がボランティアで英語の支援をしているという内容の会話である。[F]は英語を苦手としている[A]が英語を教えているということに驚いている。そして、[F]の「英語、あなたすごいね、教えて」という発話に[A]は自分が英語を苦手としていることを知っ
ていながら「すごいね」というのは皮肉であると考え「どうして皮肉を言うの、痛いところを刺すの?」と中国語で強く反発している。それに対し、[F]はすぐ自分の言い方を訂正している。論議に成功した[A]は再び朝鮮語に戻っている。

東(1997)は、利害関係の交渉のためのCSを提示し、「それは言語の役割を積極的に利用して話し手が自分の望ましい状況を作り出そうとするために使われる」と述べている。ここで注目したいのは、人は普段自分が得意とする言語を使うことで自分に有利な状況を作っていくのであるが、朝鮮語を優位とする[A]が中国語を優位とする[F]より中国語の能力が低く、中国語を使うことで不利になるかも知れない状況で、敢えて中国語に切り替えている点である。中国語が不利にありながらも、中国語での論議に成功したことは、中国語の論議の便宜さを裏付けることになる。このことは[A]と[F]に対するフォローアップ・インタビューでも確認された。[A]は中国語では簡潔で強く自分の言いたいことが言えるために、中国語にCSしたかも知れないと話している。一方の、[F]は[A]が中国語にCSすることによって、やや威嚇された感じを覚えたと話している。

4.2.1.2 聞き手の言語能力

本研究では、朝鮮語を優位とする中国語・日本語ともほぼ同じレベルである朝鮮族5人の発話のみを分析対象とするが、8人の会話参加者のうち、分析対象とはしないが中国語を優位とする参加者が2人いた。そうした彼らの相対的に低い朝鮮語能力を配慮し中国語にCSしたと解釈される例が観察された。中国語を優位言語とする聞き手の言語能力により、「聞き手を配慮」するCSが3箇所、「聞き手を特定化」するCSが3箇所であった。

会話例 12は、話者が聞き手の言語能力を配慮し、聞き手の言語能力に合わせて話したり説明したりするCSである。

会話例 12 (朝鮮語→中国語)	(訳)
D : 연변대학 일어계가 좀 이름있다 하더라	D : 延辺大学は日本語専攻が人気ある みたいよ
F : 어?	F : え?
→D : 일어계, <u>日语系</u> (笑う) 조선족애들이 많으니까	→D : 日本語専攻、 <u>日本語専攻</u> (笑う) 朝鮮族の子が多いから
F : 그러겠지 뭐	F : そうだろうね

これは、朝鮮語を優位とする[D]と中国語を優位とする[F]の会話である。[D]の「延辺大学の日本語専攻が人気あるみたいよ」という発話に、[F]が「え?」と疑問を示している。[D]は自分の発話の中で[F]が分からないと考えられるのは「日本語専攻」だけだと即座に判断し一回繰り返しているが、すぐ中国語でもう一回「日本語専攻」を繰り返している。ここで[D]は、[F]の優位言語である中国語でもう一回繰り返すことで相手の言語能力への配慮を示していると言える。また、このCSにより [F] はすぐ「そうだろうね」と答え、[D]の言っていることへの理解を示している。

ここでは、提示してないが、この前の会話で、[D] は「營口」という中国の地名を朝鮮語で言って、[F] に「營口はどこ?」と同じ朝鮮語で聞き返されたことがある。その場面で [D] が、中国語でもう一回言うと [F] がすぐ理解を示していた。ここで、[D] は、前の出来事を思い出し、自動的に自分の発話を調整し相手の優位とする中国語に切り替えたと考えられる。

会話例 13 は、話者が、複数いる聞き手候補のうち誰か一人にメッセージを向けるときにもう一つの言語で発話することによって聞き手を特定化するCS (Gumperz 1982) である。

会話例 13 (朝鮮語→中国語、中国語→朝鮮語)	(訳)
D : 야네는 뭐 이온이 나오는 クーラー도 있고	D : こっちはイオンが出る クーラーもあるよ
A : 어디? 어디?	A : どこ? どこ?
F : 就刚才那个小教室, 给留学生上课的	F : 先のあの小教室、留学生授業用の。
→A : <u>留学生特别在意吗?</u>	→A : <u>留学生には特別扱いなの?</u>
F : 就是给初级上的, 就几个人上课的地方, 好像	F : 初級の教室、数人ぐらいしかいないみたい。
→A : 근데 고중은 연길 1 중, 어디?	→A : ところで高校は延吉1中? どこ?
D : 고중은 조선학교에서 다녔어	D : 高校は朝鮮族学校だったの

この例は、本研究の協力者[D]と[A]、会話参加者[F]の3人がお弁当を買って一緒に雑談しながら食べるために教室を探している際の会話である。[D]と[A]は朝鮮語が優位な朝鮮族であり、ほとんど朝鮮語で話しているが、[F]は中国語が優位な朝鮮族で朝鮮語より中国語を好んで使用している。[D]と[A]は[F]が中国語を話しているにも関わらず朝鮮語で話す場合が多い。ここでは、[A]が朝鮮語から[F]の優位言語である中国語に切り替えることで、自分が[F]に尋ねている（[F]を聞き手として指定している）ことを示している。またそのやり取りが終わると同時に朝鮮語に切り替えることで、今度は[D]に質問をしている（[D]を聞き手として指定している）ことを示している。このように、[A]は、聞き手を明示してターンを振ることなしに、相手の言語能力にあった言葉で話すことで聞き手を特定できると言える。これは無論、この3者がそれぞれの優位言語が何であるかについて共通認識をもっていることが前提である。

以上、「言語上の要因」によるCSを「言語の特徴」と「聞き手の言語能力」の視点で分析して見た、次節では、「機能上の要因」についてみていく。

4.2.2 機能上の要因によるCS

本節では、CSを引き起こす要因であり、また目的でもある「機能上の要因」によるCSを、「談話調整」、「相互作用」、「アイデンティティ表示」の順に分析する。但し、「言語上の要因」とは違って、ここではある機能を果たそうとする狙いがCSを引き起こした要因であるとみなし、主に、CSする際の狙いを分析することを試みる。

4.2.2.1 談話調整

ここでは、談話を円滑かつ効果的に進めたり、談話の構造や運営に関わる役割をしたりしている「引用」、「強調」、「繰り返しによる明確化」、「繰り返しによる強調」の順に見ていく。

(1) 引用

本研究では、自分の発話又は誰かの発話をCSによってそのまま引用することが頻繁に観察された。CSによって引用部分を明示し、話を生き生きさせることで談話を効果的に進めて行こうとする狙いが窺われる。

会話例 14 (朝鮮語→日本語)	(訳)
→B: 그래서 내가 그렇게 말안해가 『洗い場嫌だよ』 그랬지	→B: それで私が『洗い場嫌だよ』と 言ったの
C: 오	C: ウン
→B: 안 시키면 안되는가 그렇게 말하 는거야, 『もう遅いよ、もうやめたし』	→B: じゃやらせないとためかと聞いてく るの, 『もう遅いよ、もうやめたし』
皆: (笑う)	皆: (笑う)

この例は、[B]がバイト先で洗い場をやらされたためバイトをやめてしまった話をする場面である。「洗い場嫌いだよ」と「もう遅いよ、もうやめたし」と自分が当時バイト先の店長に話す際の言葉をアクセントまで真似して引用することで、その場にいる人も当時の[B]と店長のやり取りを見ているかのように再現している。その効果はみんなが笑ってしまうことに現れている。「引用」は、Gumperz(1982)、Nishimura(1997)、スイリポーン(2003)ではCSの機能として、Gardner-Chloros(1991)ではCSを引き起こす要因として取り上げている。

(2) 強調

本研究では、自分が強調したい部分について、より発話の意図を強く表現できる言葉にCSする例15(1)のような場合と、同じような意味でもCSすることで他の発話から際立たせて強調する例15(2)の場合が観察された。

会話例 15 (朝鮮語→中国語 朝鮮語→日本語) (訳)

<p>(1)C : 우리 아버지 원래 사는거 좋아해 皆 : 오 →C : 이전에 식당했거든요, 그니까 뭐 <u>反正</u> 싸다 하면 다 끌어와 皆 : <笑う></p>	<p>(1)C : うちのお父さんは買い物が好きなの 皆 : ウン →C : 昔お店やってたの、<u>とにかく安い</u>と いったら何でも買ってくるってば 皆 : <笑う></p>
<p>(2)C : 근데 처음에 들어올때는 850 원에 들어왔다. <u>ずっとそのまま</u>, 몇년? 2년? 내랑 같이 내보다 조금 늦게 들어왔거든, 우리는 막 천円까지 올라갔는데, 개는 아직 그대로.</p>	<p>(2)C : だけど、最初に入る時は 850 円で入 ったかな、<u>ずっとそのまま</u>、何年? 2 年? 私より少し後に入ったから。私達 は千円まで上がったのに、彼はまだそ のまま</p>

例15(1)では、「とにかく」という意味の言葉を朝鮮語でのその意味より強い「反正」という中国語に切り替えることで「とにかく安いものは何でも買う」ということを強調している。例15(2)では、「ずっとそのまま」という言葉自体は朝鮮語での意味よりそれほど強い意味は持っていない。しかし、朝鮮語による発話の中でおかれることにより他の発話からより際立たせることができ、強調の機能を果たすことができる。

「強調」の機能は、Hoffman(1991)でCSの機能の一つとして提示され、スイリポーン(2003)でも観察されている。

(3) 繰り返しによる明確化

繰り返しの明確化とは、言っていることをそのまま、あるいは少し変化をつけてもう一つの言語で繰り返すことで、メッセージをよりはっきりさせることを指す。

会話例 16 (朝鮮語→日本語)	(訳)
H: 이거 달것 같다	H: これ甘そう
H: <食べてみる>그렇게 새게 달지는 않네	H: <食べてみる>そんなに甘くないね
→E: 甘くない	→E: 甘くない

ここでは、「そんなに甘くないね」という[J]の発話に[K]が「甘くない」と日本語に切り替えて繰り返すことで、甘くないことを明確化している。

(4) 繰り返しによる強調

繰り返して強調とは、言っていることをそのまま、あるいは少し変化をつけてもう一つの言語で繰り返すことで強調を示す

会話例 17 (朝鮮語→日本語)	(訳)
H: <笑う>아 그렇나, 졸업하면 바로 들어갈려고?	H: <笑う> あ、そう。 卒業したらすぐ帰るの?
→B: 그렇게 잘 된다면, うまくいくんだったら, 7,8 월달에 하면 12 월년말 결과 나올거 아니야, 되든 안되든	→B: そうだね、うまく行くなら、うまくいくんだったら、7、8月に始めると12月年末には結果が出るんじゃない、できるかどうかは別として

ここでは、「うまく行くんだったら」という言葉を最初は朝鮮語で言い、もう一度、同じことを日本語で繰り返すことで強調を示している。

「繰り返しによる明確化」と「繰り返しによる強調」は、Gardner-Chloros(1991)でもCSを引き起こす要因として観察されている。

以上「談話調整」によるCSを「引用」、「強調」、「繰り返しによる明確化」、「繰り返しによる強調」の順に見てきたが、いずれも朝鮮語から中国語へ、又は日本語へと両方向へのCSが起きている。その中、「引用」と「強調」は、中国語へのCSより日本語へのCSが多いのは、自然会話で話される出来事が日本の中での生活を背景とするものが多いことがその原因として考えられる。また、これらの機能的要因は、先行研究でも多く取り上げられており、どの言語でも関係なくCSを引き起こす要因として、機能として働いていると思われる。

4.2.2.2 相互作用

「相互作用」というのは、相手とのかかわりや発話内容に対する発話者の意図が相手に伝えられることを指す。ここでは、「相手発話への関与」、「相手発話へのコメント」、「理解・不理解の表示」の順に見ていく。

(1) 相手発話への関与

「相手発話への関与」とは、相手の発話を繰り返したり、代わりに答えたりすることで相手の発話に働きかけることを指す。

会話例 18 (朝鮮語→中国語)	(訳)
G: 他是北京日本語研究センターの →B: <u>主任, 对。</u>	G: 彼は北京日本語研究センターの →B: <u>主任, そう。</u>

このように、[G]の発話が終わってないのに、先に[G]の発話の一部を代わりに言っている。このようにCSすることで相手の発話への関与を強化している。スイリポーン(2003)では、CSによって相手の発話を繰り返したり、文末に他の言語を付けたしたりすることで相手の発話への自分の関与を示していると観察された。

(2) 相手発話へのコメント

「相手発話へのコメント」とは、相手の発話に対する自分のコメントや評価を示したり感想を言ったりするときCSすることで自分のコメントを際立たせる働きをする。

会話例 19 (朝鮮語→日本語)	(訳)
D: 자기도 가족비자는 싫고 나도 가족비자 되지 말라고 서로 자기가 하고 싶은거 하고 →E: <u>マイペースだ</u> H: 결혼은 언제 할라고 그러는데?	D: 自分も家族ビザは嫌だし、私も家族 ビザ取らなくて、お互い自分のやりた いことをやる →E: <u>マイペースだね</u> H: いつ結婚するつもりなの?

この例で、[D]の「自分も家族ビザは嫌だし、私も家族ビザにしなくて、お互い自分のやりたいことをやる」と言っている[D]の話に[E]は「マイペースだ」と評価を下しているが、日本語にCSしていることでそのコメントが際たたされている。スイリポーン(2003)でもこのような例が観察されている。

(3) 理解・不理解の表示

「理解・不理解の表示」とは、相槌などによるCSで相手の発話に対する理解や不理解を示して会話を進めていくことを指す。

会話例 20 (朝鮮語→日本語)	(訳)
------------------	-----

C : 그쪽에도 외국사람 많아?	C : そっちも外国人が多いの？
G : 많아 町田에 외국사람 굉장히 많아	G : 多い、町田には外国人がすごく多い
H : 그렇다고?	H : そうなの？
G : 町田 第二의渋谷って言われてる、 여름에 すごくにぎやか	G : 町田 第二の渋谷って言われてる、夏 にはすごくにぎやか
→C : そう？	→C : そう？
G : 町田에 109 다 있으니까	G : 町田に109まであるんだから

これは町田の近辺に引っ越したばかりの[C]に[G]が町田の話をしている場面である。[G]の「町田は第二の渋谷って言われてる」という発話に[C]は「そう？」と[G]の話が信じられないというアクセントを取っている。[G]は、[C]の不理解の表示を受け、「町田に109まであるんだから」と具体例をあげて[C]に理解させようとしている。スイリポーン(2003)、服部(2000)でもこのように理解・不理解を確認しあいながら会話を進めていく例が観察されている。

以上、「相互作用」によるCSを「相手発話への関与」、「相手発話へのコメント」、「理解・不理解の表示」の順に見てきたが、いずれも朝鮮語から中国語へ、又は日本語へと両方向へのCSが起きている。これらの機能的要因は、先行研究でも多く取り上げており、どの言語にも関係なくCSを引き起こす要因として、機能として働いていると思われる。

4.2.2.3 アイデンティティ表示によるCS

「アイデンティティ表示」というのは、ある言語を選択することで自分の準拠する社会集団（民族、国家、言語、世代など）との内的連帯や帰属意識を確認し（社会的情報）、自分の情緒や感情、性向や態度（心理的情報）を表明することである。本節では、「デュアル・アイデンティティ表示」、「仲間意識の表示」、「習慣の表示」の順にアイデンティティとCSの関係を見ていく。

(1) デュアルアイデンティティ

「デュアル・アイデンティティ表示」について東(1997)は、文の最後に単語、あるいは短い語尾のスイッチで自分たちは2つの社会に属しているのだということを確認する機能であると述べている。

会話例 21 (朝鮮語→日本語)	(訳)
C : 술 잘 안마셔, 만날 사람도 없고, 언니하고 그저 집에서 와인하고, たまに	C: お酒あまり飲まない、会う人もいないし、 お姉ちゃんと家でワイン飲むぐらい。 たまに

上記の例で、[C]は、朝鮮語で「お酒あまり飲まない、会う人もいないし、姉ちゃんと家出ワインを飲むぐらい」とそれで発話を終わらせても良いところに、「たまに」という日本語を付け加えることで、朝鮮族であり、日本で生活している留学生である自分は2つの社会に属していることを確認している。

「デュアル・アイデンティティ表示」によるCSは、朝鮮語から日本語へのCSのみ観察された。本研究の協力者は、いずれも20年あまり中国という二言語環境で育ち、日本に来てから3~5年ぐらいに過ぎない。しかし、東(1997)の「デュアル・アイデンティティ」の概念によると、朝鮮語から中国語へのCSも起きるはずであるが、本研究では見られなかった。その原因については、今回のデータでは説明し難いが朝鮮語と日本語は語順など文法的構造が似ているのに対し、朝鮮語と中国語は違っていることが文末でのCSを起きにくくするのではないかと考えられる。

(2) 仲間意識の表示

「仲間意識の表示」とは、同じグループ内の人にしか通じない言葉を使用することで仲間意識を表示することである。本研究では会話参加者全員が日本の大学・大学院で勉強した経験のある留学生で、日本に来て似たようなバイト経験のあるもので構成されているため、データでは、学生という集団の中で使われる言葉と、バイト関係で使われる言葉に頻繁にCSされている。

会話例 22 (朝鮮語→日本語)

(訳)

(1)B: <i>レポート</i> 내지마 그러면 나처럼 C: 야, 안내면 <i>必修</i> 인데 어떡하나	(1)B: <i>レポート</i> 出さないで、私みたいに C: だめ、 <i>必修</i> なんだから出さなくてどうするの
(2)B: <i>伝票</i> 잘못 나오기 시작하면 막 <i>取り消し</i> 해야되고 굉장히 복잡해	(2)B: <i>伝票</i> が間違ったら <i>取り消し</i> しないとなら ないしすごく複雑なの

(1)は、学生関連用語での「レポート」、「必修」、バイト関連用語の「伝票」「取り消し」など自分達仲間にはしか通じない言葉で話している。このような言葉は、日本の大学に留学した経験のない人、又は、バイトの経験のない人には少し違う理解をするかも知れない。このように学生経験者、留学経験、日本に来てからのバイトの経験があるという仲間意識と連帯意識を示している。

スイリポーン(2003)では、一般的な日本語として使われていない省略された言葉の使用が多く観察されたと述べているが、本研究では、同じ学生同士であることが、同じようなバイト経験を持つことが本研究の協力者達に仲間意識をもたらし、グループ内でしか通じない言葉が頻繁に使われたと考えられる。

学生同士の仲間言葉は、中国でも使用されていた言葉で、中国語へのCSも少し起きているが、バイト仲間の言葉は、中国では経験したことがないため日本語へのCSしか起きてないのだろう。

(3) 習慣の表示

「習慣の表示」とは、朝鮮語にあるにも関わらず、日常的によく使う言葉をそのままほかの言語で話すことを指す。つまり、CSされた言葉が朝鮮語・中国語・日本語どの言語にもあるにも関わらず、現在の日常生活でよく使う言葉は日本語のまま使う傾向が観察された。

会話例 23 (朝鮮語→日本語、朝鮮語→中国語) (訳)

→C : 30 분이면 갔는데 지금도 그렇게 멀 지는 않는데 <u>乗り換え</u> 가 너무 많아서	→C : 30 分で行けたのに、今はそんな遠 くはないけど <u>乗り換え</u> が多くて
→H : 몇번 <u>倒</u> 해야 돼는데	→H : 何回 <u>乗り換え</u> なきゃならないの
C : 응 2번	C : ウン、2回

上記の例で、「乗り換え」という言葉は、朝鮮語では「바뀌타다」、中国語では「倒」、どの言語でも言え、日常的によく使う言葉である。ただ、電車は日本での生活では不可欠な存在であるため、一番早く習慣的に活性化されるのは日本語である可能性が高い。これは、飲食関係、日常生活関係とともに中国語にも日本語にも多くCSされているが、電車関係、就職関係は日本語に多くCSされていることから裏付けされる。

スイリポーン(2003)では、習慣の表示として、日常的に使っている言葉、決まり文句や挨拶言葉を日本語のまま使う傾向が観察されたと述べている。

以上「アイデンティティ表示」によるCSを「デュアル・アイデンティティ」、「仲間意識の表示」、「習慣の表示」の順に見てきたが、これらの要因は自分の準拠する社会集団との内的連帯や帰属意識が大きく働いていることが分かった。また、これらの機能的要因は、先行研究でも多く取り上げられており、言語に関係なくCSを引き起こす要因として、機能として働いていると思われる。

第5章 総合考察

本研究では日本在住朝鮮族留学生の自然会話をデータとして、CSを引き起こす要因をミクロ的な観点から分析した。その結果、先行研究では重視されていない「言語上の要因」と、「機能上の要因」が観察された。

第4章では、「言語上の要因」と「機能上の要因」についての量的分析と質的分析による結果を報告し考察を試みた。ここでもっとも注目すべきなのは、言語の特徴によるCSの中の一方向進行のCSである。朝鮮語から日本語への一方向的なCSは主に、「意味領域の違い」、「気持ち・感情の表現」、「受身表現」、「曖昧な表現」、「決まり文句」などの日本語特有の表現を使う際に起きている。また朝鮮語から中国語への一方向的なCSは主に、「表現の簡潔さ」、「敬語使用回避」、「論議の便宜さ」などの言語的特徴を利用することに現れている。このような要因は、話し手の各文化、各言語の固有的慣習への好みが大きく作用していると考えられる。では、どうしてこのような好みが形成され、どうしてCSの形でコミュニケーションに反映しているのだろうか。本章では、ジェガラッツ&C. ペニントン (2000) のコミュニケーションにおける語用論的観点の理論を用いて考察を試みる。

ジェガラッツ&C. ペニントン (2000) は、「語用論的転移」を、異文化間コミュニケーションの場で生じる語用論領域の知識の転移であると述べ、人の持つコミュニケーション能力の中の文化に特有の側面が、異文化間のコミュニケーションにどのような影響を与えるかという問題を理解するには、語用論的転移についての知見を深めることが重要であると述べている。本研究では、朝鮮語を母語として、中国語と日本語の両方を話す朝鮮族同士の会話は、ジェガラッツ&C. ペニントンが指摘しているような異文化間コミュニケーション場面ではないが、朝鮮族の会話の中に、中国語と日本語という異文化の語用論領域の知識の転移がCSに反映されたのではないかと考え、以下の3つに焦点を当てて考察する。

1. 「語用論的転移」と「言語知識の転移」はどう異なるか

「転移」とは、一般的には、人が新たな知識を獲得するときにその人がすでに持っている知識がその獲得に体系的に影響を与えることを指し、言語知識の転移として多く使われている。ここでまず、明らかにしておきたいのは、語用論領域の知識が言語知識とは構造も、運用の仕方も異なっている点である。語やそれが複数集まった表現の意味についての知識（つまり言語知識）と、それらがどのように使われるかについての知識（語用論領域の知識）との間には無視できない大きな違いがある。

例えば、本研究で「表現の簡潔さ」によるCSが多く起きているが、第4章で例に挙げている「親戚訪問」という言葉を「探親」と中国語にCSして表現するのは、朝鮮語でその知識が足りないから中国語に転移したのではないことが明らかである。では、朝鮮語にもある言葉をどうして中国語で言う必要があるのか。ジェガラッツ&C. ペニントン (2000) は、

「よい話し手は相手の認知エネルギーの消費を最小限に抑えつつ、多くの情報を伝えることができる。つまり、コミュニケーションの目的とは、単に情報を伝達することではなく、それを効率よく伝達することであるといえる」と述べている。このコミュニケーションの効率性の原則が「語用論的転移」の原動力となり、もっとも簡潔に表現できる中国語へのCSを引き起こしたのではないだろうか。もちろんここで前提となるのは、相手も中国語を知っており、中国語の方がもっと簡潔に理解できるという語用論的知識を知っていることが前提となる。「語用論的転移」は、コミュニケーション上の新しい問題を解決するのに既存の知識が多少なりとも役立つコミュニケーション場面ならいつでも起こる可能性がある。ここでは「表現の簡潔さ」を例として挙げたが、本研究で観察された「曖昧な表現」など他の要因も説明可能である。

2. バイリンガル話者における語用論的転移とCS

ジェガラッツ&C. ペニントン (2000) は、異文化間コミュニケーションにおいて、言語間の文化的な差異により、語用論的転移は起こるが、ある言語の知識を過剰般化して、もう1つの言語にも当てはまると考えてしまうことでミスコミュニケーションが起こりうると述べた。

Yoon (1991) は、バイリンガル話者の転移が現実には起こっているということだけでなく、それがどのような方向にどの程度起こるかも明らかにしている。Yoon は、褒められたとき、それに応じる戦略が文化的に異なるなら、その場面での語用論的転移が起こると予想し、韓国語を話さないアメリカ英語話者 35 名、英語を話さない韓国語話者 40 名、そして英語と韓国語を話すバイリンガル話者 35 名を対象に、褒められた時の応じ方をそれぞれの言語（両言語話者の場合は両方の言語）で回答する方式でアンケート調査し、その比較を行っている。その結果、英語話者と韓国語話者の間に有意な差が認められた。戦略として英語話者が同意（褒め言葉をそのまま受け入れる）を多く使うのに対して、韓国居住の韓国語話者には謙遜（文化的に期待される）を使う傾向が顕著である。次に、英・韓両語話者が英語で応じる場合、同意戦略を英語母語話者よりは低い、韓国居住の韓国語話者よりは高い頻度で使う。このことから韓国語からの負の転移が起こっている可能性があると考えられる。その次に、英・韓両語話者が韓国語で応じる場合を見ると、謙遜戦略を英語母語話者よりは高い、韓国居住の韓国語話者よりは低い頻度で使う。このことから、この両言語話者に英語から韓国語への負の語用論的転移が起こっている可能性がある。このような負の語用論的転移はミスコミュニケーションになり得る。

ここで注目したいのは、負の語用論的転移ではなく、英語話者の同意戦略と、韓国語話者の謙遜戦略の両方が、英語と韓国語両方を話すバイリンガルに影響し、語用論的転移を起こすことである。このように、話し手が自分の母語以外にもう一つの言

語を習得するときは、その言語の言語的な知識だけでなく、文化的な知識も同時に習得し、その言語と母語の持っている知識の違いによる語用論的転移を引き起こすことになる。本研究の協力者を例に説明すると、彼らは朝鮮語という母語の知識を持って、その上に中国語と日本語と習得することで、中国語の「簡潔である」「敬語のない」などの知識、日本語の「曖昧な表現をする」、「決まり文句をよく使う」などの語用論的知識も習得することになる。

本研究の協力者となる朝鮮族バイリンガル同士で話す際、中国語の「敬語のない」という知識がそのまま朝鮮語に拡張使用してしまうとどうなるのだろうか。実際、朝鮮族同士の会話の中で、中国語を優位言語とする朝鮮族が朝鮮語を優位言語とする目上の朝鮮族に敬語を使わないことで、不快感を抱くなどミスコミュニケーションにつながる場合がしばしばみられる。同じく、日本語の「曖昧な表現」を朝鮮語にそのまま使うと「はっきり言ってくれたらいいのに」という不満を相手に抱かせるかも知れない。しかし、敬語を使いたくない場合は中国語に切り替えて表現したら、はっきり言いたくない場合は日本語で言ったらこのようなミスコミュニケーションは解消されるのではないだろうか。

このように、バイリンガル話者において、語用論的転移は不可避なものであるが、獲得した語用論的知識をそのまま違う言語に拡張使用するのではなく、その言語のまま切り替えて使うことが一番効率的であることが考えられる。また、言語の特徴によるCSは、その獲得している各言語の語用論的知識があってからこそ起こりうるものが考えられる。

3. 話し手の好み、文脈の選択、社会、文化的な慣習とCS

ジェガラッツ&C. ペニントン (2000 : p102) は、「文脈の選択において、話しての好みは重要な要素の一つである。好みの中には、フェイスとコミュニケーションの効率性に対して人が普遍的に持つ配慮から導き出される比較的理解しやすいものもあるが、コミュニケーション行動についての各文化固有の慣習を反映しているものもある。」

上記の Yoon (1991) でも明らかになったように、英語と韓国語両方を話すバイリンガルは、褒められたときに使うストラテジーとして、韓国語で韓国語話者と話すときは謙遜ストラテジーの使用が、英語のやりとりと比べて多くなる傾向がある。これは、韓国人の相手の期待に合わせて言語選択を行なう傾向（相手のフェイスを尊重する傾向）があると説明できる。でもまた、彼らが、韓国語で謙遜ストラテジーを使う度合いは韓国居住の韓国語話者のそれより低いという現象は、話し手自身の個人としての、あるいは帰属する集団の、アイデンティティを反映するようなスピーチスタイルを使おうとする傾向（自分自身のフェイスを維持する傾向）があると説明できる。ここで彼らの言語選択は、第二言語の能力不足から起こるのではなく、褒め言葉に応じるストラテジーにおけるアメリカ社会と韓国社会の文化的な違いが原因であり、その社会的・心理的圧力によって起こるということがわかる。

本研究で観察された「気持ち・感情の表示」、「決まり文句」などの言語の特徴により起きたCSを例にみて見よう。本研究で「美味しい↑」という気持ちを表した表現をするためのCSが頻繁に起きている。日本語では招待されたり、ご馳走してもらったりする場面でよく「美味しい」という表現をすることで相手への礼儀と感謝の気持ちを伝えたりする。このような現象が本研究の協力者には、文化的に期待されている日本の社会文化的慣習であると認識し、それを言わないと社会的慣習に違反するという考えるようになる。このような社会心理的圧力が原因と、上記にその言語の持っている語用論的知識はその言語のまま使うほうが効率的であるというのが原因でCSを引き起こすのではないかと考えられる。先行研究でよく言われる習慣的な使用だけでは説明しきれない。

第6章 まとめ

本章では、本研究で得られた結論と、本研究の意義、今後の課題について述べる

6.1 結論

これまでの研究では、「参加者属性」、「場面」、「話題・内容」などのマクロ的な要因に注目し、インタビュー調査、質問紙調査などの自己申告制で、以上の要因によるCSの検証を行なうものが主であった。

本研究は、朝鮮語・中国語・日本語 3 言語を自由に使える日本在住朝鮮族の言語運用に注目して、彼らの自然会話で起きるCSを引き起こす要因をミクロ的な観点から見ていくことを試みた。その結果、大きく「言語上の要因」と「機能上の要因」が観察された。

課題1では、量的分析を通して各要因によるCSの出現率とその方向性を分析し、次のことが分かった

1.1 言語上の要因からは

- ① ある言語の固有名詞、特有名詞を言う必要がある場合CSが起こる。
- ② 日本語の特徴－「意味領域の違い」、「気持ち・感情の表現」、「受身表現」、「曖昧な表現」、「オノマトペの使用」などは朝鮮語から日本語へと一方向的なCSを引き起こしている。
- ③ 中国語の特徴－「表現の簡潔さ」、「敬語がない」、「論議の便宜さ」などの特徴が朝鮮語から中国語への一方向的なCSを引き起こしている。
- ④ 話者の聞き手の言語能力により自分の発話を調整する行為がCSを引き起こしている。

1.2 機能上の要因からは

- ⑤ 談話調整の－「引用」、「強調」、「繰り返して明確化」、「繰り返して強調」などの機能によるCSは朝鮮語から日本語へ、朝鮮語から中国語へと両方向で起きている。
- ⑥ 相互作用の－「相手発話への関与」、「相手発話へのコメント」、「理解・不理解の表示」などの機能によるCSは談話調整と同じく両方向で起きている。
- ⑦ アイデンティティ表示－「デュアル・アイデンティティ」と「仲間の表示」によるCSは、ほとんどが朝鮮語から日本語への方向であり、「習慣の表示」によるCSは、朝鮮語から日本語へのCSも朝鮮語から中国語へのCSも多く起きている。

課題2では、各要因によるCSの実例を取り上げて、CSを引き起こす要因を言語的要素、社会的関係、相手認識などの点で分析を試みた。また、その要因によって引き起こされたCSが文全体にもたらす効果と、課題1の結果で示されたCSの方向性についての考察を行な

い、CS を引き起こす要因とそれがもたらす効果を明らかにした。

第5章の総合考察では、「語用論的転移」という異文化間コミュニケーションで提示されている理論を用いて本研究で多く観察された言語の特徴によるCSを考察した。二つ以上の言語を習得しているバイリンガルは、その言語知識だけでなく、語用論的知識（社会的慣習も含め）も習得することで、その語用論的転移による語用論的知識の拡張使用がミスコミュニケーションにつながる可能性がある。その拡張使用と社会的慣習からくる圧力はCSすることにより解消されるという解釈を試みた。

6.2 本研究の意義

本研究の意義は以下の5点が実現されたことにあるといえるであろう。

- ① 朝・中・日3言語を併用する朝鮮族を研究の対象とした点
 - －移民コミュニティであり、中国という二重言語環境で教育を受け、現在は第3の国日本で留学している彼らはこれまでのない複雑な背景の持ち主であり、彼らの言語運用に注目したのは本研究が初めてである。また、これまでの研究のほとんどが2言語を対象とし、3言語を対象とした研究は管見の限り少ない。
- ② 自然会話を研究の対象データとした点
 - －先行研究のほとんどがインタビュー調査、質問紙調査などの自己申告制の方法をとっており、CSを引き起こすミクロ的な要因をみることができなかった。
- ③ CSを引き起こす要因として言語の特徴に重点を置いた点
 - －今までの研究で、言語の特徴を、CSを引き起こす要因として捉えた研究は管見の限りではない。
- ④ CSを引き起こす要因として機能的要因をに注目した点
 - －本研究で提示した機能的要因は、先行研究でCSが果たす機能として多く研究されてきたが、要因として提示されたものはない。
- ⑤ 朝鮮族の言語生活で頻繁に起きるCSについて分析することで、彼らの言語使用実態を明らかにし、コミュニケーション上におけるCSの重要性を再確認した。また、CSを引き起こすには彼らの豊かな語用論知識が資源となることを示唆した。

6.3 今後の課題

本研究では、同じ言語能力、同じ言語背景を持つ話者同士の中のCSをみるため、朝鮮語・中国語・日本語3言語とも話せる日本在住朝鮮族同士の発話を研究対象とした。しかし、バイリンガル同士の発話だけでは、語用論的知識がどの程度転移され、どのようにCSに現れたかを比較することはできなかった。そこで、今後は、バイリンガル同士の発話、モノリンガル同士の発話、バイリンガルとモノリンガルとの発話を比較することでCSの実態とその意義を明らかにすることを試みたいと考えている。

また、本研究では、CSを引き起こす要因に注目してきたが、これからは、CSが起きる際の統合的規則を、朝鮮語から中国語へ（語順と文法体系が異なる）、朝鮮語から日本語へ（語順と文法体系が似ている）のCSを比較する形で明らかにすることを試みたいと考えている。

【主な参考文献】

- 東照ニ (1997) 『社会言語学入門』 研究社
- 任栄哲 (1993) 『在日・在米韓国人及び韓国人の言語生活の実態』 くろしお出版
- 任栄哲 (2003) 『在米韓国人及び中国朝鮮族の言語生活』 「環太平洋の言語」 成果報告書 B12 大阪学院大学
- イヤムポーンサイ・スイリポーン (2003) 「タイ人留学生のコード・スイッチングの実態—文法的・機能的観点から注目して—」 『お茶の水女子大学人間文化研究科修士論文』
- ウォードハフ, ロナルド (著) (1994) 田部滋・本名信行 (監訳 1996) 『社会言語学入門(下)』 リベール出版 136-154
- 宇佐美まゆみ (2002) 「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーションのための基礎的研究 平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C(2) 研究成果報告書』 研究代表者 4-21
- ヴラディミール・ジェガラッツ、マーサ・C.ペニンントン (2000) ヘレン・スペンサー＝オーティアー (編著) 浅羽亮一 (監修)、田中典子・津留崎毅・熊野真理・福島佐江子 (訳) (2004) 『異文化理論の語用論』 研究社 84-112
- 大原始子 (2004) 「アイデンティティの多層性と言語の選択・切り替え—「集団」、「個」としてのシンガポール人」 小野原信善、大原始子(編) 『ことばとアイデンティティ』 三元社 99-126
- 岡秀夫 (1995) 「二言語使用者のコード・スイッチングに関する社会言語学的研究」 『平成 6~8 年度科学研究補助金 (基盤研究 (C) 2) 研究成果報告書』 122-123
- 総谷智雄 (2002) 「延辺朝鮮族の社会学的考察」 『アジア研究』 Vol.48, No.2, April 106-127
- 金美善 (2003) 「交じり合う言葉—在日コリアン—世の混用コードについて」 『言語—特集 移民コミュニティの言語』 36 大修館書店 46-52
- 金東蘇・崔喜寿・李恩奎 (1994) 「中国朝鮮族言語研究 (韓国語)」 『韓国伝統文化研究』 Vol.9 155-483.
- 金明姫 (2004) 「日本における中国朝鮮族の生活と意識—在日中国朝鮮族就学生・留学生・社会人を事例として—」 『人間科学研究』 11 巻 2 号 65-93
- 権香淑 (2001) 「中国における『朝鮮族』の研究序説—方法論的アプローチの一考察」 『アジア研究』 Vol.47, No.3, July 81-105
- 黄鎮傑 (1994) 「在日韓国人の言語行動—コード切り替えに見られた言語体系と言語運用」 『日本学報』 13 45-62
- 国家統計局人口和社会科技統計局・国家民族事務委員会経済発展司編 (2003) 『2000 年人口普查中国民族人口資料 (上下冊)』 民族出版社
- コリン・ベーカー (著) (1993) 岡秀夫 (訳 1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』

- 大修館書店
- 上甲アリセ (1999) 「ケーススタディ：ある日系ブラジル人二世のバイリンガリズム」
『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書』 45-59
- ジョン・ガンパーズ (1982) 井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘 (訳)
(2004) 『認知と相互行為の社会言語学—ディスコース・ストラテジー』 松柏社、
高橋朋子 (2004) 「日中同時発達バイリンガル幼児の2言語混合」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 第8号 17-36
- 陳麗君 (1999) 「台湾の二言語話者におけるコード・スイッチングの要因—場面と属性を中心に」 『現代社会文化研究』 No.16 21-52
- 陳麗君 (2000) 「挨拶表現におけるコード・スイッチング」 『現代社会文化研究』 No.19 265-293
- 陳麗君 (2001) 「台湾人の会話における一方進行のコード・スイッチング—「感性的な語」・「語」によるコード・スイッチング—」 『現代社会文化研究』 No.22 237-253
- 都恩珍 (2000) 「日本語 - 韓国語バイリンガルによるコード切り替え」 『日本学報』 Vol.45 No.1 19-32
- ナカミズ・エレン (2003) 「コード切り替えを引き起こすのは何か」 『言語—特集 移民コミュニティーの言語』 36 大修館書店 53-61
- 西村美和 (1999) 「コード・スイッチング—日系カナダ人と日系ブラジル人を比較して」
『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書』 15-26
- 服部圭子 (2001) 「接触場面における日本語非母語話者のコード・スイッチング機能を中心に」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 第5号 39-58
- 本田弘之 (2005) 「中国朝鮮族の民族教育とその将来」 『杏林大学外国語学部紀要』 No.17 179-195
- 真田信治、生越直樹、任榮哲 (編) (2005) 『在日コリアンの言語相』 和泉書院 レズリー・ミルロイ(著) 太田一郎/陣内正敬/宮治弘明/松田謙次郎/ダニエル・ロング
訳 (2000) 『生きた言葉を捕まえる—言語変異の観察と分析』 松柏社 253-291
- 山本雅代 (1996) 『バイリンガルはどのように言語を習得するのか』 明石書店
- 山本雅代 (1999) 『バイリンガルの世界』 大修館書店
- Bell, A. (1984) Language style as audience design, *Language in Society*, 13, 145-204
- Blom, J.P & Gumperz, J (1972) Social meaning in structure : code - switching in Norway, *Directions in Sociolinguistics*, 34-407
- Coupland, N. (1984) Accommodation at work: some phonological data and their implications, *International Journal of the Sociology of Language*, 46, 49-70
- Eastman, C.M. (1992) Code switching as an urban language, contact phenomenon. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 13 (1&2), 1-17

- Erman Boztepe, (2002) *Issues in Code Switching: Competing Theories and Models*. Teachers College, Columbia University
- Fearch,C. & Kasper, G. (eds.) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication*. London: Longman.
- Fishman,J.A. (1971) *Sociolinguistics*. Newbury House
- Gardner-Chloros, Penelope. (1991) *Language selection and switching in Strasbourg*, Oxford University Press
- Gardner-Chloros. P. Charles, R. & Cheshire, J. (2000) Parallel patterns? A comparison of monolingual speech and bilingual codeswitching discourse, *Journal of Pragmatics*, 32, Elsevier, 1305-1341
- Grosjean, F. (1982) *Life with two languages, An introduction to Bilingualism*, Harvard University press.
- Hoffman, C. (1991) *An Introduction to Bilingualism*, Longman
- Koziol,Jessica Marie. (2000) Code Switching between Spanish and English in contemporary American society, St,Mary's College of Maryland
- Nishimura,Miwa. (1995) A functional analysis of Japanese/English code-switching, *Journal of Pragmatics*, 23 158-181
- Nishimura,Miwa. (1997) *Japanese/English code-switching : syntax and pragmatics*, Peter Lang Publishing, Inc.
- Margurite M. & Hakuta K. (1991) Translation skill and metalinguistic awareness, *Language processing in bilingual children*, Cambridge University Press, 141-166
- Myers-Scotton, Carol. (1997) Relating Lexical Borrowing and Code switching, *Duelling Language : Grammatical Structure in Code switching*, Clarendon Press, 163-182
- Saville-Troike, Muriel. (1982) *The ethnography of communication: An introduction*. Oxford: Blackwell.
- Valdes-Fallis, G. (1977) Code switching among bilingual Mexican-American women: Towards an understanding of sex-related language alteration. *International Journal of the Sociology of Language* 17: 65-72
- Yoon,K.K. (1991) Bilingual pragmatic transfer in speech acts: bidirectional responses to a comp-liment. In L.F. Bouton and Y. Kachru (eds), *Pragmatics and Language learning*. Vol. 2. Urbana: Division of English as a Second Language, University of Illinois ar Urbana-Campaign, 75-100

【付録】

枠組み：影響要因／機能／言語選択&CS に主に影響する要因

Gardner-Chloros(1991) 影響要因(A)	スイリボン(2003) 機能(B)	本研究 影響要因
1 話者の能力	<u>タイ語をベースにした場合</u>	I 言語特徴と聞き手の能力による CS
1.1 聞き手の特定化	1 アイデンティティ表示機能	1 言語特徴による CS、
1.2 語彙の必要性	1.1 自己伝達の機能	1.1 語彙の必要性(A-1.2)
2 対話者への認識	1.2 習慣の表示	1.2 意味領域の違い
2.1 聞き手の特定化	1.3 仲間意識の表示	1.3 気持ち・感情の表示(B-2.1)
2.2 聞き手の排除	2 話し手内面表示機能	1.4 受身表現
2.3 連鎖 CS	2.1 気持ち・感情の表示	1.5 曖昧な表現
3 特定会話の特徴	2.2 理解・不理解の表示	1.6 決まり文句
3.1 個人的か客観的か	3 補償的機能	1.7 オノマトペ
3.2 ユーモラスな影響	3.1 母語にはない語彙	1.8 表現の簡潔(Hoffman1991)
3.3 イデオロギーの提示	3.2 母語で思い出せない語彙	1.9 敬語使用回避
3.4 回避戦略	4 中立的機能	1.10 論議の便宜さ
3.5 修正戦略	5 その他	2 聞き手の言語能力による CS
4 話し言葉の特徴	<u>ベースが特定できない場合</u>	2.1 聞き手の特定化(A-2.1)
4.1 引用	6 談話調整機能	2.2 聞き手への配慮(都 2000)
4.2 感嘆	6.1 引用を示す	II ディスコース戦略による CS
4.3 繰り返し	6.2 強調を示す	3 談話調整による CS
4.4 メッセージの限定	6.3 ある話題の結論を示す	3.1 引用(A-4.1;B-1.1)
4.5 要請の緩和又は強調	6.4 発話権の獲得を示す	3.2 ダブルシグナル(都 2000)
4.6 繰り返して強調	7 相互作用機能	3.3 強調(B-1.2)
4.7 ユーモラスな影響	7.1 相手発話に対するコメント	3.4 繰り返しによる明確化(A-4.3)
4.8 回避	7.2 理解・不理解の表示	3.5 繰り返しによる強調(A-4.6)
4.9 ディスコースマーカ	7.3 アドレス転換	4 相互作用による CS
4.10 比喩的なスイッチ	7.4 相手発話への関与	4.1 相手発話への関与(B-2.4)
5 より深い理由	8 理解達成促進機能	4.2 相手発話へのコメント(B-2.1)
5.1 個々の特徴	8.1 確認の要請を示す	4.4 理解・不理解の表示(B-6.2)
5.2 言語変化	8.2 自己発話への追加説明	III アイデンティティ表示による CS
5.3 民族の妥協	8.3 説明の要請を示す	5.1 デュアルアイデンティティ(東)
5.4 社会的なふるまい	9 中立的機能	5.2 仲間意識の表示(B-5.3)
	10 その他	5.3 習慣の表示(B-5.2)

朝鮮族の言語生活調査

(調査協力の依頼)

本調査は、日本在住の朝鮮族留学生の言語生活を明らかにするため、貴方の貴重なご意見を調査の研究資料として使わせていただきたいと思います。ご協力をよろしくお願いいたします。

尚、個人名を公表することは一切ありません。資料は研究データとしてのみ用い、プライバシーは厳密に守られます。お忙しい所大変申し訳ないのですが、ぜひご協力よろしくお願いいたします。回答は□の中には ✓ (チェック)、() の中には具体的に記入してください。

お茶の水女子大学 日本語教育コース

博士前期課程 金珍淑

01. 名前() 02. 年齢() 03. 出身地()

04. 所属()

05. 中国在住朝鮮族は朝鮮語を勉強するべきだと思いますか。

はい いいえ どちらでもない

06. 朝鮮語を流暢に朝鮮族 2, 3 世に対してどう思いますか。

親密感を感じる 民族意識が強いと思う 羨ましいと思う

当然のことだと思う 気分が悪い どちらでもない

07. 若い世代に朝鮮語を教えることをどう思いますか。

必ず教えたい できれば教えたい 本人が望んだら教えたい

特に必要だと思わない 教えたくない どちらでもない

08. 家族構成員全員にチェックしてください、あの人とは主にどの言語で話しますか。

続柄	使用言語		
<input type="checkbox"/> 祖父、祖母	<input type="checkbox"/> 朝鮮語	<input type="checkbox"/> 漢語	<input type="checkbox"/> 両方
<input type="checkbox"/> お父さん	<input type="checkbox"/> 朝鮮語	<input type="checkbox"/> 漢語	<input type="checkbox"/> 両方
<input type="checkbox"/> お母さん	<input type="checkbox"/> 朝鮮語	<input type="checkbox"/> 漢語	<input type="checkbox"/> 両方
<input type="checkbox"/> 配偶者	<input type="checkbox"/> 朝鮮語	<input type="checkbox"/> 漢語	<input type="checkbox"/> 両方
<input type="checkbox"/> 兄弟/姉妹	<input type="checkbox"/> 朝鮮語	<input type="checkbox"/> 漢語	<input type="checkbox"/> 両方

09. 今まで住んでいた所を記入してください (但し、1 年未満の場合は除いてください)

朝鮮族が多い 漢族が多い 半々

() 才から () 才まで (省 市/県)

() 才から () 才まで (省 市/県)

() 才から () 才まで (省 市/県)

() 才から () 才まで (日本 県 区 学校)

他()

10. 普段の交際に朝鮮族が多いですか。それとも朝鮮族以外の人が多いですか。

朝鮮族が多い方だ 漢族が多い方だ 日本人が多い方だ 他 ()

11. 学校はどの民族学校に通いましたか。授業は主に朝鮮語/漢語どの言語が使われましたか。

小学校: 朝鮮族学校 漢族学校 言語: 朝鮮語 漢語

中学校: 朝鮮族学校 漢族学校 言語: 朝鮮語 漢語

高等学校: 朝鮮族学校 漢族学校 言語: 朝鮮語 漢語

12. 朝鮮語についてどんなイメージを持っていますか。1-6まで一つずつ選んでチェック。

1. 軽快だ リズムよく話せない どちらとも言えない

2. 柔らかい 堅い どちらとも言えない

3. 速い 遅い どちらとも言えない

4. 感性的だ 理性的だ どちらとも言えない

5. 敬語があつていい 敬語があつて不便だ どちらとも言えない

6. 効率的だ 非効率的だ どちらとも言えない

13. 朝鮮語はどの程度できますか。1-4から一つずつ選んでチェック。

とてもよくできる よくできる 少しできる できない

1. 話す:

2. 聞く:

3. 読む:

4. 書く:

14. 漢語についてどんなイメージを持っていますか。1-6まで一つずつ選んでチェック。

1. 軽快だ リズムよく話せない どちらとも言えない

2. 柔らかい 堅い どちらとも言えない

3. 速い 遅い どちらとも言えない

4. 感性的だ 理性的だ どちらとも言えない

5. 敬語があつていい 敬語があつて不便だ どちらとも言えない

6. 効率的だ 非効率的だ どちらとも言えない

15. 漢語はどの程度できますか。1-4から一つずつ選んでチェック。

とてもよくできる よくできる 少しできる できない

1. 話す:

2. 聞く:

3. 読む:

4. 書く:

16. 日本語についてどんなイメージを持っていますか。1-6まで一つずつ選んでチェック。

1. 軽快だ リズムよく話せない どちらとも言えない

2. 柔らかい 堅い どちらとも言えない

3. 速い 遅い どちらとも言えない

4. 感性的だ 理性的だ どちらとも言えない

5. 敬語があつていい 敬語があつて不便だ どちらとも言えない
6. 効率的だ 非効率的だ どちらとも言えない
15. 日本語はどの程度できますか。1-4から一つずつ選んでチェック。
- | | とてもよくできる | よくできる | 少しできる | できない |
|--------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1. 話す: | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 2. 聞く: | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 3. 読む: | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 4. 書く: | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
16. どの言葉が一番よく出来ると思いますか。()に順番で記入してください
() 朝鮮語 () 漢語 () 日本語
17. 日本にいる間にどの言葉を一番良く使いますか。
() 朝鮮語 () 漢語 () 日本語
18. 将来自分にとって大事なものはどの言語だと思いますか。()に順番で記入してください。
() 朝鮮語 () 漢語 () 日本語 () 英語 () 他
19. 早くメモを取りたいときにはどの言葉を使いますか。
 朝鮮語 漢語 日本語
20. 文章を早く読んで、理解するにはどの言葉で来た文章が早いと思いますか。
 朝鮮語 漢語 日本語
21. 自分の考えを一番良く伝えられるのはどの言葉だと思いますか。
 朝鮮族 漢語 日本語
22. 数を数えるとか暗算をするとき、どの言葉で考えながら計算しますか。
 朝鮮語で 漢語で 日本語で 他()
23. 夢を見るときはどうですか。
 朝鮮語で 漢語で 日本語で 他()
24. (日本で) 初対面の朝鮮族と話するとき、主にどの言葉で話しますか。
 朝鮮語 漢語 日本語 場合による
25. (日本で) 仲がいい朝鮮族友達と会って話するとき、主にどの言葉で話しますか。
 朝鮮語 漢語 日本語 場合による
- (問題 26-28 は問題 24, 25 について具体的に書いてください)
26. 朝鮮語ならどうして朝鮮語だと思いますか。どんなことが理由になると思いますか。
() () ()
27. 漢語ならどうして朝鮮語だと思いますか。どんなことが理由になると思いますか。
() () ()
28. 日本語ならどうして朝鮮語だと思いますか。どんなことが理由になると思いますか。
() () ()

調査にご協力頂き誠に有難うございました!